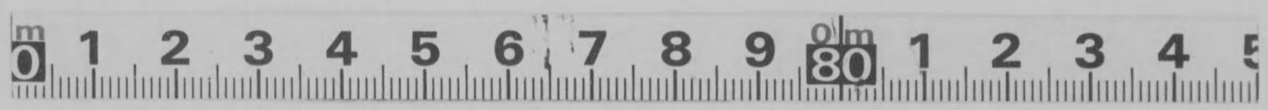
360
328

始



祖國色彩畫

河上 啓

序

大正二年十月著者日本を出でゝ、西歐の間に遊ぶこと一歲、大正四年二月歸朝す。本書は主として其間に得たる見聞感想を錄せるもの。その中、中央公論に載せたる小篇二種を除くの外、他は凡て大阪朝日新聞に寄せたもので、中には同時に東京朝日新聞に揭載されたものもある。

著者は幸福である。どんな物を書いても、少くとも一人は必ず愛讀者があると確信して、常に之を公にすることが出來る。其愛讀者といふは彼の父である。彼の父は、彼の書いたものならば、どんな拙い文章でも、又どんな專門的の論文でも、一字

一句のがさず鄭重に讀んで吳れるのである。そこで彼は、官命に依りて異邦に遊べる一歲の間も、絶えず其感想見聞を錄して新聞雜誌に公にし、半ばは彼の父母への消息に代へたものである。彼の父は彼の書いたものをば一々切拔いて鄭寧に保存し、彼の歸朝を待つて之を彼に與へた。彼は其を材料にして、或物には多少の補說を加へ、或物は之を反古籠に棄て、かくて此小册子を編纂し了へたのである。雜駁な內容を有する本書の命名に苦んだ著者が、遂に祖國を顧みてと題するに至つたのも、斯かる因緣によるので有らう。

大正四年十一月初四、雨ふる夜　　河上肇

要目

第一篇　西洋と日本
第二篇　日本民族の血と手
第三篇　戰塵餘錄
第四篇　漫遊雜記

細目

第一篇　西洋と日本……一

西洋文明の分析的性質……三

上篇

一　西洋の分析主義と日本の一纏め主義——衣食住に就いての比較…三

二　舞踏及び音樂……九

三　文字及び文章……一一

四　西洋は分析後の綜合——日本獨特の盆栽、庭園、茶室……一三

下篇

一　西洋の個人主義……二〇

二　權利の主張——社會組織の單位たる個人間の限界……二四

三　日本の家族關係……二七
四　西洋の智識と日本の智識……二九
五　西洋に於ける物質的文明……三一
六　日本趣味……三三
七　彼我の根本的相違……三四
鍵附の戸と紙張の障子……三七
一　鍵の國……三七
二　障子の國……四〇
三　内と外……四一
四　貞操の帶……四五
加算と減算……四八
一　釣錢の出し方の相違……四八

二　同じやうな樣々の相違……五一
第二篇　日本民族の血と手……五七
日本民族の血と手……五九
一　序……五九
二　ワイルドの日本藝術觀……六二
三　『經濟人』……六四
四　人間の茶碗と犬の茶碗……六八
五　西洋の便所……七二
六　國家か金貨か……七五
七　西洋の物質文明……八〇
八　優等人種は如何にして生ずるや……八四

九　尊き日本民族の血……九〇
十　混血雜婚の弊……九五
十一　戰爭と血液の損害……九八
十二　乃木伯爵家の斷絶……一〇〇
十三　日清日露兩戰役の影響……一〇二
十四　歐洲大戰の血液的損害……一〇四
十五　歐洲大戰の物質的損害……一〇七
十六　野蠻人の物質的生活……一一三
十七　野蠻人の精神的生活……一一七
十八　人は道具を製造する動物なり……一二〇
十九　機械と近世の文明……一三六
二十　富國の根本義……一四一

第三篇　戰塵餘錄

伯林脫走記……一四七
一　日本人の大持て……一四九
二　通信の杜絕……一五〇
三　伯林居殘りの決心……一五二
四　萬里故鄕を隔つ……一五四
五　一時の緩和……一五五
六　十四日午後の急變……一五七
七　伯林の夜逃げ……一五九
八　西に西にと走る……一六〇
九　國境の一夜……一六三

十　國境の檢査……一六四
十一　やつと和蘭……一六五
十二　汽車中の祝盃……一六六
英獨の開戰……一六九
一　百餘日の前……一六九
二　當夜の伯林……一七一
三　英獨の外交……一七五
四　獨逸宰相の憤怒……一七九
五　開戰前の獨逸……一八三
六　開戰前の英國……一八七
七　最上の戰機……一九二
獨逸式と英國風……一九八

一　獨逸の寄留屆……一九八
二　獨逸式の便利……二〇一
三　萬事計畫的……二〇四
四　苦に覆はれたる英國……二〇七
五　禁札の國……二一〇
六　獨逸の文化と英國の自由……二一三
七　英國人と獨逸人……二一七
八　戰時の伯林と倫敦……二一九
英國の陸軍……二二三
一　泥坊を見て繩をなふ……二二三
二　手數の掛る國柄……二二六
三　血のめぐりの遲い英國——兵士募集と婦人……二二九

第四篇　漫遊雜記

巴里最初の印象……二三七
一　ホテルの一夜……二三九
二　巴里のカフエー(上)……二三九
三　巴里のカフエー(下)……二四三
四　カルチエー・ラタン……二四六
五　下宿探し(上)……二五一
六　下宿探し(下)……二五五
三月の末巴里にて……二五八
一　ギヨタン……二六二
二　パスチユの牢獄とカーナーヴレー博物館……二六五

三　女權論者の示威運動……二六八
倫敦のウエストミンスター寺院と巴里のパンテオン……二七三
倫敦郊外の墓地……二八一
倫敦より田舍に移りて……二九六
一　倫敦の下宿住居……二九六
二　寄席見物……二九八
三　議會傍聽……三〇〇
四　ショーの講演……三〇二
五　田舍落ち……三〇四
六　英國の田舍……三〇五
七　地主の跋扈……三〇八
八　英國の僻村にも日本の名は知らる……三一〇

西洋と日本

へめぐりてあまたの國のさまを見て
住むべき國は日本とぞ思ふ

西洋文明の分析的性質

本論は余が着歐後幾に四十餘日目に起稿したもので、西洋文明に對して余が得たる最初の印象である。上篇は大正三年二月七日ブルユツセルの下宿にて脱稿し、下篇は其より巴里に出で、暫く巴里の市中を彷徨して後、二月二十日に執筆したものである。上下兩篇共に西洋文明の分析的性質を有する方面を力説したもので、後に掲ぐる「日本民族の血と手」と相俟つて、余が西洋文明觀の一斑を成すものである。

上篇

一　西洋の分析主義と日本の一纏め主義—衣食住に就いての比較

西洋文明の特色は分析的で、單位と單位との分界が極めて明確な點に在ると思ふ。

先づ眼に着くものは建築であるが、其は言ふまでもなく、主として煉化石から出來て居る。然るに其煉化石なるものは、皆同じ形、同じ大きさの單位から成り立つて居るもので、其れが種々に集積され結合されて、大小高低樣々の建築物となつて居る。其煉化石の集積が恰も日本の壁に當る。余の考へでは、此西洋の壁と日本の壁との差異が、正に西洋の個人主義乃至世界主義と日本の家族主義乃至國家主義との差異を表現して居ると思ふ。西洋人は何物に限らず之を分析して同じ單位の集合と見ようと努める。そこで、建築物の壁でも人間の手で左右するを得る限りは、之を分析して、持ち運びに都合好き程度の單位たる煉化石なるものに解剖して仕舞ふ。而して其單純なる一樣の煉化石を積上げて、遂には天を摩するばかりの大建築を造る。單位は小さいが建築は大きい。個人主義であるが嚮て世界主義になる。

日本文明の特色は非分析的で、凡て物を一纏めとする點に在る。其故建築物の壁でも、西洋流の煉化石の集積とならずに、非分解的の、左右上下に不分割的の連

絡を有つた、一箇の統一物になつて仕舞ふ。其代り斯かる組織では大建築は出來難い。家族主義國家主義になつて、世界主義にならぬ所以である。

西洋の建築物は、床を見ても、皆同形同大の石又は板の集合である。而して其單位が何れも小さい。*これでこそ建築物の材料でも、科學的智識を應用して大規模の生産を爲し得ること、思ふ。日本の疊は同形同大の單位から成り立つて居て、其點は一見予の所謂西洋式なるもの、如くなれども、之は只已むを得ず自然の原料に制せられて然るので、若し西洋人をして之を造らしむれば、必ずや今少し持ち運びに便利なるやう更に之を小さなる單位に分解したで有らうと思ふ。

*日本の坐板と同じ位の大さの板で出來て居るのもあるが、其は田舍の粗末な家である。立派な家になるほど、一單位の板が小さくなつて、寄木細工式になる。世界屈指の建築たる巴里のルーヴル美術館の床の如きは、極く小さな板を寄せ集めて拵へてある。然るに日本では、立派な建築ほど所謂一枚板なる大きな板が使つてある。

次に食器を見ても、矢張り如上の傾向が現はれて居る。西洋の食皿はどれもこれ

も皆同形同大のものである。凡ての煉化石が同じきやうに、凡ての食皿が同じい。スープを盛るとか云ふやうな特別の必要なき限りは、凡ての食器を同じ單位のものに還元しようと努めた形跡が著しい。然るに日本式では其と反對に、飯を盛る食器、汁を盛る食器、刺身を盛る食器、酢の物を盛る食器、香の物を盛る食器、其他凡ての食器を成るべく形を異にし大さを異にしようと努める。其故、西洋式の食事では同一の食器が一回の食事時に數回役に立ち得るが、日本式の食事ではさうは行かぬ。又西洋の食器は煉化石と同じことに、大規模の生産に耐え得るが、日本の食器は本來の精神が之を許さぬ。猶之と關聯して一の對照を爲せるは日本の膳と西洋の食卓である。日本の膳は椀なり皿なり盃なり箸なりを一纒めにするものである。椀とか皿とか云ふものゝ本來の精神より云へば、相互に獨立し又膳と分離して、箇箇別々に單獨の存在を爲すべきものでは無くて、凡てが膳の上に互に頼つて一の統一體を爲し始めて一の單位を成すのであるが、其が實に日本の家族主義と同じ精神

のものゝやうに思ふ。然るに西洋では一箇の食皿が其自身で單獨に存在すべきものなので、從つて一箇の皿を食ひ終らば、直に之を退けて更に他の皿を置くと云ふ流義である。而して之が如何にも西洋の個人主義と同じ性質のものゝ如く思はれてならぬ。斯る差異の必然の結果として大規模の宴會は西洋式に限ると云ふことに爲る。日本式の料理屋でも可なりに大きい宴會が催されぬことは無いが、併し彼方に一團、此方に一團と云ふやうに、全體が若干の團體の統一なき集合たるに過ぎぬものと爲る。

然るに西洋式になると、何百と云ふ大勢の人々が一堂に會して兎も角も統一ある宴會を爲すことが出來る。此點は、日本人が國家主義を執り、西洋人が世界主義に走り得ると同じ趣である。併し三四の友人相會して一夕の清會を催さんには、京都で云はゞ瓢亭式の茶室めいた所が誠にふさはしい。西洋料理屋で腰掛けながら話すよりも、一層落付きが有つて遙に打ち解け易い。此點は日本人の國家主義の強さ

が西洋人の世界主義と比較にならぬのと同じ趣であるかに思ふ。

衣服には以上述ぶるが如き特徴が其程著しく現れて居ない。之は人間の體軀が洋の東西を問はず略同一であるが爲である。併し其にしても多少の差異が無いでは無い。卽ち洋服なるものは四肢の輪廓を明かにして居るのみならず、分解し得らるゝ限りは之を分解して、例へば襯衣とズボン下、上着とズボンと云つた風に、上下を別々の物に切り離して居る。其れが日本になると、羽織袴は別として、上着も下着も肩から足まで續いて居る。其を何枚か重ねて、其上を帶でぐる〳〵と卷附けるのである。又着物には皆袖が着き、羽織にしても袴にしても等しく輪廓の甚だ漠然たるものである。手も胸も腹も脚も凡てぐる〳〵と一纏めのものに卷附けたる如き感じのものである。更に着物を合すための工夫に就いて考へて見るに、洋服ではボタンなるものを用ふるが、之は同形同大の單位のもので、二つなり三つなり四つなりのものが相集まつて着物を綴る役目を果して居る。其點が日本服に於ける帶と

か、袴の紐、羽織の紐なるものと甚く趣を異にして居る。

殆と差異の無かるべき筈なる服裝に於てさへ、能く考へて見ると、以上述べたるが如くに、分析的分解的の西洋主義と非分析的一纏的の日本主義との差異が何となく發現し居るが如くにも思はれる。

二　舞踏及音樂

當地に來てダンスを觀たのは唯の一回である。其で早くも西洋の踊を日本の其と比較するのは、固より輕卒の誹を免れぬことなるが、試みに所感を述ぶるならば、西洋の踊は全然直線運動の集合に外ならざるかの觀がある。藝、微に入り細を穿つと云ふ妙處に達しても、其演技は直線的震動の迅速なる集合に外ならぬと思ふ。如何にも活動寫眞的である。日本の踊に就いても余は全くの素人であるが、一見して西洋の踊とは趣の違ふものゝやうに思ふ。日本の踊は曲線的である、圓くて角が

無い。

思ふに曲線を分析すれば無限に小さき直線の集合と見ることが出來、又圓を分析すれば無限に小さき邊を有せる多角形と見ることが出來る。西洋の踊も日本の踊も何れも踊たるに於いて一たる以上、其間さまで甚だしき差異の有るべき筈はないが、而も根本に於て一は直線的であり、一は曲線的であると云ふ大なる性質の差異があるかと思ふ。一方は無限に小さき邊を有ちたる多角形であり、他方は一箇の圓である。前者は飽くまでも分析的であるが、後者は到底同じ單位の運動に分析するを許さゞる性質のものかと思ふ。

西洋の踊では、一の運動と他の運動との分界が極めて明截で、謂はゞ鋭角的であるが、日本の踊では、一の運動から他の運動への移目が實に穏かで和かである。成るべく骨張らず圓く曲線的に行くのを尊ぶやうである。此點は、西洋に於ける各個人の關係が權利義務で實に明截なる分界を有するに反し、日本に於ける各個人の關

係が成るべく角立たぬを尊ぶの傾きあると、甚く其趣を同じくして居ると思ふ。音樂となると愈以て余は其門外漢であるが、想像するところ矢張り踊に就いて述べたるが如き差異が在るのでは無いかと思つて居る。例へば日本の謠曲の如きは到底西洋流の譜に載らぬものなのでは有るまいか。然るに西洋の歌は恐らく凡て譜に載るもので、つまり之を分析して一定の單位音の集合と見得らるゝのでは無いかと思ふ。併し余は如何にも音樂の門外漢であるから、これ以上のことを云ふは姑く控ゆる。

三　文字及文章

次に文字を詮索して見るのに、矢張り同じやうな差異がある。西洋人は成るべく簡單な單位に事物を分析しやうとする傾向が強いから、凡ての音を書き表はす爲に僅にａｂｃ以下の二十六文字を造り出したきりである。彼等は實に此の二十六文字

で凡ての事を書き表はして居る。數千頁の大本でも分析して見れば凡て此の二十六文字に還元することが出來る。これ恰も天を摩するの大建築も、之を碎いて見れば大部分は同形同大の煉化石や板や石やに分割されて仕舞ふと云ふのと全く同じである。其故活字を造るにしても、印刷をするにしても、恰も煉化石を大規模に生產し得ると同じやうなる便宜がある。

然るに吾々の使用して居る漢字は、全く之と趣が違ふ。甚だしく分析の不完全なる文字である。尤も之は日本人の作つた文字ではないが、日本人の作つた假名にしてからが、同じく分析の行屆いて居ないものである。例へば余が姓の河上は四音から成り立つて居るが、之をば假名で書けば四音を其のまゝにカハカミと四文字に書くに反し、羅馬字では各音を母音と子音とに分析して Kawakami と八文字に書くのである。又文章を綴る時には、日本流にすれば河上氏はブルユッセルに居ると續けて仕舞ふのであるが、西洋流にすれば Monsieur Kawakami est à Bruxulles と云ふ

やうに、五關節に切れて仕舞ふ。『河上』と『氏』と『ブルユッセル』と『に』と『居る』とが各分離して其分界を明確にすることに爲る。日本人は非分析的で物を一纏めにし、西洋人は分析的で單位と單位との分界を明確にするの傾向があると云ふことは、斯かる點にまで發現されて居る譯である。

四　西洋は分析後の綜合—日本獨特の盆栽、庭園、茶室

西洋式では凡て物を分析して簡單なる單位に還元すること以上述ぶるが如くであるが、扨て斯かる簡單なる單位は其れ自身獨立さしては意味を爲さぬから、自然の結果として多數の單位を集めて其全體の上に意味あらしめようとすることに爲る。分析の結果として綜合と云ふことが起る。併し其綜合なるものは分析を經たる後の綜合であるから、日本流の最初から餘り分析を試みずに物を一纏めとするのとは、

甚く趣の違つたものである。

先づ手近かな所から二三の事例を引き來つて之を説明せんに、例へば彼の盆栽の趣味の如きは全く日本の趣味である。分析も無い代りに、同じ單位のものを集めて集め方の上に趣味を出したと云ふ性質のものでも無い。只だ一本の樹なら樹を、幹と枝と葉と自ら之を一纏めにして見て、そこに千年の星霜を經たる巨樹大木の趣を味ふと云ふ譯である。菊花を賞するにしても、根元に附ける葉まで、見棄てずに、幹なり葉なり花なりを一纏めにして賞するのである。

然るに西洋には此の如き意味の盆栽なるものは無い。菊花を賞するにしても、最も美しい部分の花だけを切り離して賞するのである。從つて只一つでは面白味がない、成るべく澤山に之を集めて、然る後全體の上に何等かの面白味を感じ美事さを味ふと云ふのである。庭園の造り方にしても、西洋流では一本々々の木を切り離して仕舞つて居る。其故、只一本の木を見たのでは何の面白味もないが、其代り西洋人は

其一本々々の木を一定の間隔を置いて行儀正しく植ゑ込み、此の如くにして全體の上に何等かの面白味を出して居る。

されば之が自然の結果として西洋の庭園術には左右均一と云ふことが原則に爲つて居る。然るに日本固有の庭園には、左樣なる人爲的の小供らしき所は全く無い。京都で云へば、金閣寺の庭にしろ、銀閣寺の庭にしろ、左右均一の主義を採つた所は一つもない。山川池澤、草木巖石、自然に相集まつて自ら絶景を成せる山間幽谷の樣を其まゝ一纏めにして之を縮圖したものが、日本の庭園である。人爲的の分析もなければ、人爲的の綜合もない。

此意味に於いて日本趣味は實に自然的であるが、之と同時に他の意味に於いては實に人爲的である。全體に於いて自然の形を存しようとする點に於いては誠に自然的であるが、全體に於いて自然の形を存し乍ら而も之を美ならしめんとするが爲に其組成分子に甚しき人爲を加へ、猶且其人爲の跡を蔽はんとするが故に、其組成

分子に對しては種々無理なる註文が全體の爲に要求さるゝことゝ爲る。金閣寺の庭にしろ、銀閣寺の庭にしろ、松の木一本、松の枝一枝が決して思ふがまゝに手足を伸ばして居る譯では無い。全體との均合を保つ爲に、或は枝を切られ或は幹を曲げられつゝ、甚だ窮屈なる思ひをして生を保つて居る譯である。

盆栽となりたる松にしても亦同じことであつて、決して思ふ存分に伸びたものでは無い。西洋人が見て、如何にもひねくれた人爲的のものだと思ふのも、此點から云へば無理は無い。

併し余をして云はしむれば、西洋の庭園こそ或意味に於いて甚だ人爲的のものである。勿論箇々の木は思ふ存分に伸びて居る。山なり原なりから拔いて來て植たままの物である。而して此意味に於いては誠に自然的である、各個の樹が自由を享受して居る。併し是等箇々の樹を集めて一箇の公園としようとする時、西洋式に行ければ、そこに驚くべきほど露骨なる人爲が加はり、且其人爲の跡を蔽はんとせず、

寧ろ之に矜るのである。自然の草木は決して一定の間隔を有しつゝ列を成して育つて居るものでは無い。彼等は決して互に左右均一の配置を執つて育つて居るものでは無い。然るに西洋式の庭園では、殆ど凡ての草木が一定の間隔を有しつゝ列を成して左右均一の配置を執つて居る。此點より云はゞ西洋の庭園ほど人臭きものは無い。而して余の見る所に依れば、日本及西洋に於ける個人相互の社會關係そのものが亦正に此の如き差異を有すと信ずるが、其は暫く後に讓り、今少し話の續きを續けねば爲らぬ。

西洋式の庭と日本式の庭とは、其根本精神が以上述べたる如く相違して居る。そこで西洋式に行けば、庭の面積が相當に廣くないと面白く行かぬ、或は廣ければ廣いほど都合が宜いとも云へる。

然るに日本式では、面積が相當に狹くて差支がなく、否廣くなれば廣くなるほど却て都合が惡くなる。日本式でも廣い庭が造れぬことも無いが、併し廣い庭を造る

と其は單に幾何かの庭を寄せ集めたと云ふだけのものに爲つて、全體が一箇の庭としての統一を保つといふことが無くなつて仕舞ふのである。

吾々日本人から云ふと、西洋式のものは庭にしても、建築にしても、日本式のものに比べると、質の優劣は別として少くとも量に於いては遙に優るものゝ如くに思はれる。日本の茶室、日本の庭園、日本の盆栽、是等は到底西洋人の解し得ざる深奥幽遠の趣味に富んだものであるが、併し規模が何れも小さい。規模の小さいのが日本的なのだから仕方が無い。

日本人は過去に於いて大建築を造り大庭園を造り得ざりしがために之を造らざりしには非ずして、恐らく小建築小庭園に依りて充分なる滿足を得たりしが故に、大建築を造り、大庭園を造ることに考慮を費さなかつたので有らう。日本の茶室趣味は四疊半だけの面積があれば充分に發揮することが出來る。否千疊敷の茶室を造るなど云ふことは日本の茶室の精神に反するのである。

然るに西洋式の建築になるとゴチック式にしろルネッサンス式にしろ、其趣味を四疊半だけの面積の上に發揮することは不可能である。根本の精神がさうであるから、日本には大建築と云ふべきものは殆ど無いが、西洋には雲突くばかりの大建築がある。西洋の建築が日本の建築に比し量に於いて優るは當然の結果である。建築に就いて云へば、例へば煉瓦石の如き、之は極めて簡單な單位であるから、其を無數に集めると云ふことは造作もない事である。又庭園に就いて云へば、例へば樹木の如き、之も自然に生長したまゝの木であるから、其を澤山に集めることも譯は無い。

此の如くにして建築にしろ庭園にしろ、何れも原料が豐富だからいくらでも大規模のものが出來る。西洋にいくら大公園があり大建築があるからとて、吾々は決して驚くに及ばぬ。又自らを卑下するに及ばぬ。吾々の過去の文明は、彼等の文明と丸で出發點を異にし立脚地を別にして居るのである。

下篇

一　西洋の個人主義

上篇に於いては、西洋人の造り出だせし衣食住に關する有形物、例へば建築、衣服、食器、庭園等、主として直に吾等の眼に觸れ得る物を材料として、西洋文明の特質は分析的で單位と單位との分界が極めて明確な點に在るといふ事を述べ、引いて舞踏、音樂、文字の事などに論じ及んで置いた。今此下篇に於いては、聊か無形の方面に論じ進んで見たいと思ふ。

西洋人が個人主義であるといふ事は、從來屢書物でも見、人からも聞かされた事であるが、こちらに來て色々な具體的の實例を見聞するにつけて、其所謂個人主義なるものゝ意味が大分明確になつたやうに思ふ。ブルユツセルで知人の宿つて居た家の主人は鑛山の技師で、普通教育は勿論專門教育も受けた立派な紳士であるが、

其夫婦間の契約なるものを聞くと、吾々は甚だ奇異の感じがする。

先づ結婚の際の費用に就いて、夫たる者及妻たる者の分擔すべき項目が委細に規定してある。次いでは結婚後の費用の分擔の仕方、死後に於ける財產の處分の仕方等何れも亦明細に規定してある。さうして彼等は、夫婦間の財產關係を斯くまで綿密周到に規定し居る事を自分達の誇りとして居るので、『どうです吾々の契約は誠に遺憾なきものでせう』などゝ自慢しながら之を見せるのである。

蓋し既に上篇に於いて述べたる如く、西洋文明の特色は、分析的で、單位と單位との分界が極めて明截な點に在る。今之を社會に就いて考ふるに、其社會を分析して窮極に達すれば、最後の單位として個人が殘る。而して其一單位たる個人と個人との分界を極めて明截にするといふことは、西洋に於ける社會組織の根本的精神である。

それ故、夫婦親子、是等の者が漠然と一纏まりになつて家族を形造り、其家族が社會組織の單位に爲つて居るといふが如き事は、西洋に於いて夢想だもすべからざ

る事である。親子は勿論のこと、夫婦でさへが、決して漠然と一纒まりに爲つて居るのでは無い。一纒まりどころか、權利義務の分界が剃刀で切つた如くに截然と明瞭に爲つて居て、若し資金の融通でもすれば夫婦の間にチヤンと貸借の關係が成り立つのである。

夫婦相合して一家を成すは、譬へば產業組合を作り株式會社を作ると同じとで、單純に相互の利益の爲である。相互の利益の爲と意識しつゝ、一男一女より成れる組合を組織して、其者等が同じ天井の下、同じ床板の上に共同生活を營みつゝあるが、卽ち西洋の夫婦である。實は夫婦相合して一家を成すのでは無くて、唯だ一人の男と一人の女とが夫婦といふ組合を作つて居るに過ぎぬ。其關係は賣買や、貸借の債權債務の關係と本來は同じ精神のものである。

其が日本になると、夫婦親子が渾然又は漠然と一纒まりのものに爲つて居て、其間債權債務の關係といふが如きものは殆ど全く之なきを普通として居る。其渾然又

は漠然と一纒まりを爲したるものが所謂家族で、而して其家族なるものが實に社會組織の單位である。

之を觀念的に說明せば、西洋にては一人の男と一人の女とが先づ存在して、然る後に夫婦といふ組合が出來る。然るに日本にては、先づ家族があつて、其家族の組成分子として、親あり子あり夫あり妻ありといふことに爲る。日本の壁は上下左右に連絡を有つた不可分的の一纒りのものであるが、西洋では其が煉化石といふ單位の集積から出來て居るといふことは、余の既に述べた所である。また日本では飯を盛る食器、汁を盛る食器、刺身を盛る食器、香の物を附ける食器、凡そ是等のものが膳に依つて一纒りのものにされて居るが、西洋では此の如き食器の區別なきのみならず、凡ての皿が其自身獨立して一の單位をなし居ることも、余の既に述べた所である。庭を作るにしても、日本では種々の草木、巖石の類が渾然として一纒りのものにされて居るが、西洋では草でも木でも一本宛それ〴〵に一の單位を爲し

居る趣あることも、また既に述べた所である。然り是等のことは余の既に上篇に於いて縷述した所で、今更繰返すまでも無いことであるが、今彼我の間に於ける社會組織の差異を考ふるに、其趣の相似たること實に茲に述べ來りしが如くである。

二　權利の主張―社會組織の單位たる個人間の限界

下宿屋に居て何か壞したならば、主人は遠慮なく損害賠償を請求する。『遠慮』といふ意味の言葉は西洋の辭書にも在るが、併し權利義務の問題になると、彼等は何時でも何等の遠慮なしに一切の權利を主張する。物を賣つて代價を請求すると同じ心持で、一切の場所に一切の權利を主張する。『あなたは今月洗面器を壞しました、それで其代價として十法だけ勘定書に書き入れてあります』と出て來る。言ひ難くさうにするでも無ければ、顏を赤くする譯でも無い。其代りに下宿料を支拂ふ時に

も、腑に落ちぬ項目があれば、こちらから質問する。僅か五十錢乃至五錢のことでも、必ず質問すべきである。然る時は、對手は快く之を說明する。間違つて居たらば之を訂正する。それで何等の感情を害する譯で無い。五錢の事を問ひ尋ねても決して紳士の體面を汚す譯のものでは無い。五錢でも一錢でも、權利は權利として主張せぬと、相手方は勘定知らずの馬鹿と侮るだけの事である。

此點は日本に於ける遣方と丸で相違して居る。根本的に、東と西との相違である。而して吾々は、十分に此相違を意識して此地に滯在し居りながら、兎もすれば遠慮し過ぎてしくじる程に、吾々は如何にも日本的である。カツフエーに入つて釣錢を默つて取らずに置けば、給仕は『有り難う』とは云はぬ。馬鹿が權利を拋棄したから拾つてやれと思ふだけの事なのである。釣錢は釣錢として受取り、然る後十文か二十文かやれば、始めて『有り難う』と云ふ。金錢の贈與に對して一言の謝辭なかるべからずとするのであらう。此の如くにして、カツフエーの給仕さへ權利の拋棄と權

利の讓渡とを區別して居る。而も此區別は、日本の法學生が敎壇の講義に依つて始めて意識するに至る所のものである。

要するに西洋に於ける社會組織の單位は個人であつて家族で無い。分析を好む彼等は、家族といふが如き一纒りのものを一單位と考ふるに堪え得ざるもので、之を分析して個人に至らざれば滿足しない。

而して其社會組織の單位たる個人と個人との分界は、苟くも之を曖昧にして置くに安んぜざるもので、其趣は恰も煉化石と煉化石の繼目の如くである。西洋では建築物の煉化石が『平等』を唱へて居る。公園の並樹が『自由』を主張して居る。どの煉化もどの煉化も皆な同じやうなものであるから、彼等が平等の思想を養成するに何の不思議も無い。公園の並樹も互に一定の間隔を取つて分界を明かにして居る代りには、何れも思ふ存分に手足を伸ばして居る。彼等が亦自由の思想を養成するに何の不思議も無い。

而して西洋に於ける個人は卽ち建築物の煉化石であり、公園の並樹である。西洋の社會に於いて、普通の日本人の理解し兼ぬる平等乃至自由の思想の勢ひあると、必然の結果である。乍併、煉化石と大理石とは全く違つたものである。煉化石同志は平等であつても、大理石に對しては非常な懸隔がある。そこで一方には平等の思想が甚しき勢を有するに拘らず、他方に於いては又驚くべきほど强烈なる階級の思想がある。

三　日本の家族關係

日本には西洋に於けるが如き有力なる平等の思想もないが、其と同時に西洋に於けるが如き峻烈なる階級の思想もない。日本に於いては、凡ての社會關係に於いて赤と靑と相接して居るのでなくて、必ず其中間に紫があり、赤は何時とはなしに紫になり、紫がまた何時とはなしに靑になる。一家の中には親が居り子が居り

夫が居り妻が居り、兄弟姉妹が居る。しかし是等個人の關係は決して西洋に於けるが如く債權債務の分界の明截なるものでは無い。

勿論親は親として、夫は夫として、子は子とし、妻は妻として、各〳〵其地位を異にして居て、決して平等なものでは無いが、しかし其關係に何となく紫色の所があつて、強て分界を立てざる中に一纒めのものにして、之を家族と名けて居る。そして其家族と他人との分界をぼかす爲には、そこにまた親族といふ紫色のものがある。

日本國家なるものは此の如くにして成立し、此の如くにして成育したる世界獨特の國家である。日本の社會組織には實に言ふべからざる面白味があつて、西洋の社會の如く煉化石を積んだるが如き機械的の臭が全く無い。其代りには各個人が互に遠慮して居る。恰も日本の庭園の樹木が全體との釣合を保つ爲に、枝を切られ幹を曲げられつゝ、互に遠慮して生活して居ると同じ趣の生活をして居る。個人が思ふ存分に手足を伸ばして居らぬ。道德の基礎には犧牲、謙遜、推讓と云ふが如き種

類の德性が根を擴げて居て、兎もすれば有爲の天才が無爲の家族や親族の爲に夥しく犧牲になる場合が多い。全體は纒るが、個人としては兎角伸び難き弊がある。

四　西洋の智識と日本の智識

今日吾々日本人が西洋人に最も劣つて居る所は科學的智識の缺乏であるが、元來この科學なるものが西洋人に依つて發明され且彼等の手に依つて發達したと云ふことは、言はゞ當然の事であると思ふ。

既に屢〳〵言ふが如く、西洋人の特徴は、凡ての事物を分析して、之をば出來得る限り簡單なる單位に還元して仕舞ふと云ふ點に在る。然るに今科學なるものは何ぞやと言はゞ、卽ち一切の事物現象を簡單なる單位の集合と見る學問に外ならぬのである。例へば化學では一切の事物を何十種かの元素に還元して仕舞ひ、物理學では

之を電子とか云ふもの、集合と見、生物學では一切の生物を細胞の集合と見るが如くである。是れ恰も壁を分析して煉化石と爲すと同じ方針、同じ精神の遣方である。されば此煉化石を發明したる西洋人の手に依つて嚮て科學が發達するに至つたと云ふ事は、或意味に於ては、實は何の不思議もなき事である。

科學の特徴は理解し易き點に在る。大建築を分析して煉化石とすれば、其煉化石の理解し易きが如くに、科學的智識は理解し易い。說明に依つて之を他人に傳へ得べきものである。そこで後人出で、先人の業を紹ぎ、年を經て其智識を集積せる間に、遂に今日の如き科學の大建築が出來上つた譯である。

今日本に於ける智識の特徴は、以心傳心といふ處に在る。科學の本旨は文字を立つるに在れども、日本固有の學問は凡て不立文字を宗旨として居る。印度より傳來して今も現在の日本に存續せる禪學の如きは、到底西洋社會の產物では無い。西洋は科學の國である、分析的智識の國であるが、日本は禪學の國である、以心傳心的

智識の國である。西洋は物の國である。日本は心の國である。

五　西洋に於ける物質的文明

今日の西洋に於ける物質的文明の盛な事は誠に驚くべきものであるが、其原因の大半は之を機械の發明に歸すべきである。此事は余が從來幾度か著書論文に述べた所であるから、茲に其委細を略するが、唯今日まで余が久しく疑問としたる所は、何が故に是等機械の發明が凡て彼等西洋人の手に依つて行はれ、吾等日本人は毫も其功に與らなかつた乎と云ふ點であつた。然るに或夜始めて此地の踊を觀たる折、此疑問が釋然として氷解したるが如き心地がした。

西洋の踊と日本の踊との差異は、余が既に上篇に述べたる所である。思ふに其見解は或は甚だしき謬見に屬するものかも知らぬが、兎も角全くの素人としての余が始めて踊を觀たる時の感じは、西洋の踊は如何にも機械的活動の趣があつて、要

するに直線運動の集合に外ならぬと云ふ事に歸着した。

そこで思ふに、元來人間の勞働なるものは元遊戯と合體して居たもので、それが文明の進歩に從つて次第〳〵に分化し、勞働と遊戯とが全く別種の活動になつて來たのである。

余が少年の折未だ父母の膝下に在りたる頃は、餅搗きなる特殊の勞働者の群が居て、正月の餅は、其勞働者が家々の玄關前の空地に臼を据ゑて搗き上げる習慣が行はれて居たが、其餅搗きは五六人の若者が聲を合せて餅搗き歌なるものを歌ひながら面白い調子でやつたもので、小供の頃は其餅搗きの踊にも似たる樣を見るのを年中行事の一として指折りつゝ待ち遠しがつたものであつた。

思ふに此一例に依つても略推測せられ得るが如く、勞働は元と遊戯の變形である。然らば西洋に於いて人間の勞働の代理をする機械と、西洋に於いて人間の遊戯の主要部分を占むる踊との間に何等かの連絡あることは、敢て怪むに足らぬ譯である。

蓋し機械の作用は廣大且複雜を極めたものであるが、しかし其本質は若干の簡單なる單位的運動の集積に外ならぬので、如何に廣大複雜に見ゆる働きでも、若し之を分析するならば、何れも皆極めて簡單なる若干の單位的運動に還元し去るを得るのである。

斯く考へ來るならば、機械の發明も亦、煉化石を積みて大建築を作ると同じ性質の發明に屬するので、其が西洋人に依つて行はれたと云ふ事に何も不思議はない。從來余は、日本に機械の發明なきは、日本人の創造力が乏しきが爲に外ならざるべしと考へて居たが、今にして思へば、西洋人と日本人とは其創造力の種類性質を異にして居るに過ぎぬのである。

六　日本趣味

『荒浪や佐渡に横ふ天の川』、『春雨や人住みて煙壁をもる』、『易水にねぶか流るゝ

寒さ哉』、誦し來れば僅々十七音の中に一幅の畫圖懸々として眼前に浮ぶ。之が純粹の日本趣味で、實に世界獨特のものである。僅々十七音より成る詩形は、西洋諸國何れの國に於いても到底吾人の見出すを得ざる所のものである。況んや一音をも發せざる禪學の如きは普通の西洋人の如何にするも解するを得ざる性質の學問である。

吾々日本人は大建築を有せず、科學を發明せず、機械を發明せざる代りには、西洋人の有せざる茶室を有し、禪學を有し、俳句を有して居る。吾々は西洋人が吾々の有せざる多くのものを有するを見て、直に彼等を偉い人種であると驚嘆して仕舞ふ傾きがあるが、何に評價は急ぐに及ばぬ、能く見れば彼等も亦吾等の有する多くのものを有せずに居るのである。

七　彼我の根本的相違

思ひ見れば、東西の文明は根本に其方向を異にして居る。只幸なる哉、西洋の

文明は分析を原則とするもの故、吾々にとつては比較的理解し易き性質の文明である。西洋人が日本の文明を理解することは恐らく甚だしき難事であらうが、吾々日本人が西洋の文明を理解することは割合に容易である。さればこそ明治維新以來僅々四十餘年の間に、吾々は西洋の科學を輸入し、西洋の機械を輸入し、盛に彼等の文明の長所を利用しつゝある。悲しい哉年月を經ること未だ淺きが爲に、吾國に於ける西洋式の文明は未だ以て西洋諸國と肩を並ぶるに至らぬが、藉すに歲月を以てせば將來は多く悲觀するに足らぬと思ふ。

人は能く西洋先進國なる文字を用ふるが、西洋諸國は西洋式の文明に於いてこそ先進國なれ、日本固有の文明は西洋式の後れたるものでは無くて、違つた道を歩んで居るものである。又人は能く日本人は模倣に長けた國民といふが、今の西洋文明は元來模倣し易き性質の文明なのである。西洋人等は日本の文明を模倣すべく未だ之を理解するに至り得ざるものである。斯くて東西文明の眞の調和を計るの天職を

有するは、如何にしても吾等日本人であらねばならぬ。

余は斯く考へつゝ今巴里の都に來て、二三日の中には又フランス語の稽古を始めようなどゝ思つて居る。今食事を濟ましたまゝの所であるが、下宿の飯がまづいので、食つても腹の減つた氣持である。之では腹が減つてもひもじゆうないどころの話では無いと、自ら嘲りつゝ此拙論の筆を擱く。

鍵附の戸と紙張の障子

本篇は鍵を題材として西洋文明の特色を述べたもので、前に掲げし「西洋文明の分析的性質」の補説とも見るべきものである。

一　鍵の國

西洋人の精神的乃至物質的生活を何かに纏めて掌の上に載せて見せろと註文をさるゝならば、私は鍵を出して示さうと思ふ。始めてブルユツセルの素人下宿に入つた時、定められたる自分の部屋を見廻して、私は鍵の多いのに驚いた。戸を開けて部屋に入ると、其戸を内から閉ぢる爲に鍵がある。北側に窓がある。其窓に又鍵がある。一度是等の鍵を下したならば、誰も私の部屋には入つて來れぬ事に爲つて居る。

是等の鍵を見て、道理から云へば私は安心すべきであらうが、實際は寧ろ薄き不安と淺き危惧に襲はれた。戸棚がある、勿論戸に鍵があり抽出に鍵がある。洗面

臺の下に四段の抽出がある、一々其に錠が拵へてある。机にも抽出がある、其にも亦錠が拵へてある。凡そ開閉の出來るものに、特別の鍵の裝置の無いものは、全く無いのである。郵便を一つ入れに出る、歸る時には必ず鍵を出して錠を脱さぬと、家の大戸は開かぬのである。夜になると、其大戸に内から錠を下ろす。鍵がなくては外からは如何せ開かぬ戸であるが、猶用心のために更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は、外から鍵を入れて一回半廻さぬと、戸は開かぬ。鍵の生活に慣れぬ私は、此大戸の鍵の用法に就いて容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿のT君は、嘗て鍵を忘れて遂に一夜をホテルで過された事があると云ふ。

巴里に來て始めて西洋の旅館に宿つた。私の部屋は戸を閉めると、鍵がなければ外からは開けられぬ。其にも拘らず、内から又錠を下す爲に別の鍵が備付けてあつた。

只今の宿は島崎藤村君の向隣であつて、同君が讀書の燈は私の窓から坐りながら

見られるが、而も同君の部屋に御訪ねする爲には、錠の下りる戸を四度通らねばならぬ。白晝に御訪しても一度は鈴を鳴らして内から戸を開けて貰はねば、同君の部屋の戸を敲く譯には行かぬ。

私はブルユツセルと巴里を見ただけであるから、猝に斷言は出來ぬが、恐らく西洋諸國に於ける鍵の數は人口の幾倍かに當つて居るだらうと思ふ。聞く所に依ればこの巴里市の各停車場にて下車及び乘車する者日に三十三萬人、地下鐵道に乘る者日に百七十萬人といふが、假に是等の人々が五個宛の鍵を有つて居るとしても、此巴里市だけで一日約一千萬の鍵が汽車に乘り降りする筈である。其外電車に乘り、自動車に乘り、馬車に乘り、乃至は靴に乘つて歩いて居る鍵を算へ上げたならば、往來して居る鍵だけでも、恐らく半億に達するであらう。實に西洋は鍵の世界である。

西洋は個人主義の國である。それ故部屋を圍むに厚き煉化の壁を以てし、出口に重

き戸を設け、戸に丈夫なる錠を下ろし、蟄居する時は敢て之を窺ふを得ざらしめて居る。如何に親しい間柄の者と雖も、他人の室に入るには先づ戸を敲く。すると内に居る人が入れと應ずる。例へば佛蘭西では『アントレー』といふ。其『アントレー』の聲を聞くまでは、今リンで呼んだ下女と雖も、決して其戸を開けぬのである。

二　障子の國

今此地に在つて遠く日本を顧みれば、日本は實に家族主義の國である。而して日本の家族主義が西洋の個人主義と恐ろしき差異を有するが如くに、日本人の住居の樣は恐ろしく西洋人の其と相違して居る。錠を下ろしたる重き戸の代りに、日本では紙一枚の障子で部屋を圍んで居る。出入自在である。共同主義である。たとひ一軒の家が五間になつて居やうと、十間になつて居やうと、實は一間の家である。五間六間乃至數十間の室が離るゝが如く卽くが如くにして、茫然漠然自ら一室を成

せるものが日本の家である。此『家』は實に日本獨特のものである。夫婦始め家族一般相倚り相信じて一體を作し其間一點の秘密をも存せざる所が、日本の『家族』なるものゝ精神である。

而して此精神を建築で現せば卽ち日本流の家屋になる。錠を下ろした戸の代りに紙で張つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。併し例へば此巴里の眞中に左樣な家を造つて見ても、之に住ひ得る巴里人が居ない。西洋人は室を有つて居る、しかし西洋には家がない、家を有つて居るのは世界で唯日本人だけである。——少くとも今日の文明國に於いては。

三　内と外

西洋人は個人主義であるから社會主義である。玆に社會主義といふは所謂社會主義のことでは無い。家を有せざる彼等は、或意味に於て社會を家となし居るが故に、

夫を名けて假に社會主義と云つた迄の事である。

といふは彼等は公園を家として居る。吾々が家に居て寢ころんで新聞を見ると同じ氣持で、彼等は公園のロハ臺で新聞を讀んで居る。吾々が自分の庭で家族と遊んで居ると同じ氣持で遊んで居る。彼等は又カフエーを自分の家として居る。彼等は此處に來てトランプを遊び、新聞を讀み、手紙を書く。されば何處のカフエーにも筆と狀紙と狀袋が備へ付けてある。さうして公園やカフエーでは、多勢の者が皆一緒である。部屋に鍵をかけて引込んで居る連中にしては、實に不思議なほど公開的である――男女相抱いてキッスするまでが凡て公開的である。

料理屋にしても、日本ならば各組が其れ〴〵四疊半なり六疊なり八疊なりの部屋を占領するが常であつて、簡單な牛肉屋でも机毎に衝立で遮るのが在來の風習であるが、西洋ではカフエーでもレストランでも、机と机と相接し、椅子と椅子と相並べて、知合でもなき客が同じ机で飲食して居る。彼等にとつては、內と外との區

別が日本人ほど截然として居ない。家を有たぬ代りに社會を家とせる趣がある。

日本人は家に上る時は必ず下駄を脫ぐ。家の內と往來とは、吾等にとつては全く別のものである。然るに西洋人は土足のまゝで自分の部屋に入る。或意味に於いて部屋が往來であり、少くとも廊下は街路であるが、其代り彼等は又た市街の道路の改善の爲に骨を折り、或は石を敷きアスファルトを敷き又は木を敷き居るが故に、或意味に於いては道路が部屋の一部であり、少くとも廊下である。家の內と外との區別が甚だ少い。其意味に於いて、彼等は家を持たぬとも思はれ、又町全體を家として居るとも見られる。

日本に道路の發達せぬのは、一は家族主義の結果である。日本人は自分の家には跣足にて上り、疊を敷詰め、其上に坐し、其上に寢ね、其上にて食事する程、家の內は綺麗にして居るが、此潔癖家の日本人が――然り日本人は實に潔癖家である――永き間道路を今日のまゝにして居たのは、全く家族主義の結果である。

潔癖家揃の日本で大道の便所の夥しく汚いのも、矢張り同じ道理である。西洋の家の内にある便所は、日本のそれに比べて斷じて汚い。（説明は今略するが）。然るに大道の便所は、日本のと比較すべからざる程度に清潔である。之を見てハイカラ者流は、流石は公德の進んだ西洋であると感歎するであらうが、實はそんな理合のものでは無い。公園の花を折らぬも同じ道理である。彼等は公園を自分の宅と思つて居る。自分の宅の花を折つて何處へ持つて行かうぞ。自利心の當然の結果が所謂公德心である。日本人が自分の庭の花を無暗に折らぬと同じ事なので、何も感服するには及ばぬ事である。

吾々は花を見ると、すぐ家を想ふ。折りて家に持ち歸らばやと思ふ。悲しい哉。西洋人は左樣の家を有たぬのである。或は、公園が自分の庭であつて見れば、折りて持ち歸る必要を感ぜぬのである。

四　貞操の帶

思はず餘談に馳せて長くなつたが、今一つお話したい事がある。私は先日クルユニー博物館を訪ねた時『貞操の帶』Ceinture de chasteté なるものを見て、東西人情の懸隔の甚しきに驚いた。貞操の帶とは妻の私通を防ぐ爲の錠付の帶である。私の見たのは、一は十字軍役時代のもので、之は腰を横に卷く帶になつて居り、一は其より四五百年後の十六世紀時代のもので、之は餘程進歩して縱に穿く鐵板製のものに爲つて居る。斯かる帶はブルユツセルにも在ると聞いたが、見たのは此地に來て初めてゞある。

ブルユツセルに居た頃、下宿の主婦は、女の口から云つては恥しいが、人の妻たる者で貞操を守つて居る者は十人に一人もあるまいと云つて居た。迂遠の學究、新來の旅客、此地に於ける内部生活の秘密は敢て窺ひ知るを得ざれども、人の肉體に

錠を下ろすの必要あるを感ずるに至つては、鍵の生活も亦憐むべきかなと思ふ。聞く所に依れば、日本にも農商務省が特許品と認めた操帶と云ふものがあるさうだ。併し之は斷じて日本人の發明ではあるまい。恐らく此地に於ける貞操の帶の直譯に過ぎまい。恐ろしい物を輸入したものである。

しかし獨逸に於ける親族法も、帝國議會の協贊を經て、直譯のまゝ輸入されて居る今日の日本なれば、貞操の帶が直譯のまゝ輸入されて、農商務省の特許を得て居るなどは、或は怪しむを要せぬ事かも知れぬ。何れにしても、貞操の帶は鍵の世界たる西洋の原産物である。

思ふに、元來此鍵なるものは、極めて個性的な、極めて正確なものである。所謂合鍵を外にしては、一の鍵は一の錠にしか適合せざる性質のものである。其鍵で一切を締めて行く所の西洋人が、軈て科學を發明し、機械を發明し、權利義務を發明し、親子夫妻でさへ其關係を債權債務で締めて行くのは、畢竟何の不思議もなき次

第である。吾々は科學も輸入せねばならぬ、機械も輸入せねばならぬ、法律も輸入せねばならぬ、又鍵も輸入せねばならぬが、扨て其鍵は之を適當に輸入したいものだと思ふ。（大正三年三月十六日巴里にて脱稿）

加算と減算

西洋では物を買ふ時商賣人の釣錢の出し方が日本と違ふと云ふ事は、着歐匆々余の氣附いた所であるが、其が果して歐洲一般の風習であるか否かゝ確でないので、最初「西洋文明の分析的性質」を書く時には、之を省略して置いた。然るにブルエツセルより巴里に出で、巴里より更に伯林に移りて見るに、釣錢の出し方は凡て一樣に日本と逆となり居ることを確めし故に、伯林に着する匆々執筆して本稿を成した。勿論前に揭げし「西洋文明の分析的性質」の補説となるべきものである。

一　釣錢の出し方の相違

西洋人は凡ての事物を簡單なる單位に分析し、其單位を基に之を集積して、複雜なる現象を説明し、廣大なる文明を建設しつゝある。物理學で一切の現象を單一なるエレクトロンの離散集合と見、化學で一切の物體を若干元素の化合物と見るは、卽ち此西洋氣質が學問研究法上に露はれたのである。

今日西洋では學問が進歩して居るといふけれども、それは自然科學で、たとひ社

會科學と稱せられるものでも、少しく進歩せるは盡く自然科學的研究法を用ひたものである。建築は煉化石といふ簡單なる單位の集積物である。ダンスを見ても、亦簡單なる單位運動の連續物である。音樂は簡單なる單位音の集合物である。一見して驚くべき精妙なる機械の作用も、分析すれば單純なる單位運動の結合に過ぎない。圖書館に行けば、何十萬の藏書がある。しかしながら文字はＡＢＣ二十六文字の外に出でない。如何なる詩人の神品も如何なる學者の勞作も、皆此のＡＢＣ二十六文字に分析解剖されて仕舞ふ。されば西洋文明は或る意味に於て非常に複雜だが、他の意味に於ては譯もなく簡單なものである。

之に比して、日本文明は一見簡單なやうで、實は複雜極まるものである。日本人は西洋式に物を分析しない。煉化石の代りに壁を作り、直線的のダンスの代りに曲線的の舞を舞ふ。之に就いて面白い實例がある。西洋では買物をした時釣錢の寄越し方が違つて日本とは逆の遣方である。例へば一圓七十五錢の買物をして五圓札を

出したとすると、其の釣錢を寄越すのに、日本ならば引算をする。卽ち五圓から一圓七十五錢を引くと三圓二十五錢になるといふので、先づ一圓札を三枚出し、次に二十錢銀貨を出し、最後に五錢の白銅を出す。さうして此遣方は、少くとも私にとつては頗る便宜な遣方である。

所がヨーロッパの釣錢の出し方は日本では引算をするのに、こちらでは加算をする。例へば前と同く一圓七十五錢の買物をして五圓の銀貨を出したとするならば、其の釣錢を寄越すのに、こちらでは一圓七十五錢といふものを臺に置いて、其へ段々と釣錢を加へて行つて五圓にするのである。卽ち最初に五錢を出して八十錢と云ふ。初めの中は何の事だかさつぱり分らなかつたが、實は七十五錢に五錢を加へるから、其れで八十錢になると云ふのである。次に十錢を出して九十錢、又十錢を出して、二圓と云ふ。買物の代價が一圓七十五錢の所へ二十五錢足したから二圓になると云ふ譯なのである。それから一圓出して三圓、更に一圓出して四圓といひ、最

後の一圓で、丁度五圓になりますねと云ふ。私は釣錢を取る毎に、かういふ逆の計算法を、殊に聞きつけぬ異國の言葉でやられるので、どれ位まごついたか知れない。夫れに先方は動もすれば大きな單位で釣錢をごまかさうとして居るし、パリでは無遠慮に僞金を摑ませうとするのだから、一寸した買物でも餘程億劫に思つたものである。今でこそやつと此計算法の原則だけは飲み込んだが、併しとても斯ういふ逆の計算法に隨いて行く譯には行かぬ。そこで先方で五錢出して之で八十錢、十錢出して九十錢と、勘定しながら釣錢を並べて居る中に、私の方では夫れに頓着なく引算をやつて、一圓餘の買物だから、大體三圓餘の釣錢が來る筈と先づ大綱を摑まへて、大凡そこちらのものであれば、よろしい〳〵と、分つたやうな顏をして店を出る。

二　同じやうな樣々の相違

私は凡ての日本人が私と同じやうに計數に疎い者とは考へない。併し初めて西洋

に來た日本人ならば、釣錢の勘定に日本とは正反對の加算を用ゐ、金を出すにも單位の小さい所から出し始めて、最後に一番大きい金を出すといふ此西洋流の遣方に出會つた時は、多少はまごつく事だらうと思ふ。此釣錢の勘定が彼我逆に行つて居る所は、甚だ興味ある事である。前にも云ふ如く、西洋人は單位集積の思想強きに反し、日本人は兎角物を一纒めにする傾向がある。此性情の差異は偶釣錢の勘定法にまで現はれたのではあるまいか。日本では家又は家族といふ一纒りのものが先づ存在して、然る後に夫婦の別があるといふ事になつて居る。然るに西洋では一人の男と一人の女とがあつて、然る後家族といふ一種の組合を作るのである。少くとも觀念上に於いて、日本では家族が夫婦に先だち、西洋では一男一女といふ單位が家族といふ組合に先んじて存在して居る。此點は國家觀念に就いても矢張り同樣であらう。蓋し日本の國家なるものは、吾々にとつて一の歴史的成果である。吾々が此世に生れ出ぬ前から、既に日本の國家がある。觀念上國家が先に出來て、其國家

を組成する個人は後から出來たものである。然るに西洋人の思想では、先づ個人があつて、其等の者が相互便宜の爲一の組合を作つたのが卽ち國家である。思ふに彼の自由契約說なるものは、國家成立の歴史的說明としてこそ非難せらるれ、觀念的には恰も正に西洋流の國家思想を代表したものである。日本に於ても、最近三四十年の間には、之と根本的に思想の系統を同うする幾多の政治論、國家論、憲法論が輸入された。私は今此見地から、先に述べた加算と減算の相違を說明しようとするのである。

巴里に居つた頃、理學者のI君に此事を話したら、其方の云ふには、計算上引算よりも加算が正確に行れるものなる事は論を俟たぬ、されば西洋人が釣錢の勘定に加算をするのは當然の事である。たゞ何故日本に於てのみ減算をして居るかと云へば、それは日本人の頭腦が幼稚で不正確だからと說明するより外は無い、西洋人はAB C二十六文字を發明して居るのに、日本人は今日まで面倒な漢字で我慢して居るで

は無いか、西洋人は科學を發明し機械を發明して、偉大なる物質的文明を建設した、日本は只之を模倣し輸入しつゝあるだけでは無いか、要するに日本人が馬鹿なのであると云ふ說明であつたが、私は加算と減算との相違を、單に日本人の頭腦の劣等なるに歸するに忍びない。例へば日本の繪畫は從來影を附けなかつた。併し私は之を以て千有餘年の間に輩出した幾多の畫家が光線に對して盲目であつたからだとのみ說明したくない。多くの西洋人は釣錢の勘定に加算をするばかりでなく、姓名を書くにも自分の名を先にして、家族の名(姓)を後に書く。日本では河上肇と書くも、こちらへ來てから肇河上と書くことを餘儀なくされて居る。名宛も日本國京都市岡崎町何番地と經つた所から單位に下りて行くのが日本流であるが、西洋流では何番地岡崎町京都市日本國と云ふやうに、單位から始めて大きなものに纏めて行く。此の如く引算と加算との相違と全く同じ性質の相違が、種々の方面に些細な點に迄現はれて居る。此意味に於て日本文明は根本的に西洋文明と出發點及び方向を異に

せるものである。一部の人は、日本に何か西洋と違つた點を見出す毎に、直ぐ日本の發達が幼稚なる爲であると解釋する。併し是等の差異は、日本が西洋と同じ道を辿りながら後れて居るが爲に生じて居るものゝみではなく、西洋が西に進むに反し日本は東に進むと云ふやうに、文明の方向が違つて居る爲に生じた場合も少くない。科學的文明、物質的文明、機械的文明、それは日本人が近頃輸入した西洋式の文明である。吾々が其種の文明に於て太く西洋諸國に後れて居ることは否まれぬ。是非とも驅足で追つ付かねば爲らぬ。凡て輸入を急ぎ模倣を急ぐの外はないが、之と同時に、吾々は驚くべき發達を遂げたる日本式の文明を有つて居る事を忘れてはならぬ。此日本式文明は西洋式文明の輸入を急ぐが爲に、決して粗末に打ち壞すべきものでは無い。(大正三年五月伯林に於て執筆)

日本民族の血と手

ロンドンの繁華の巷にたゝずみて
ふくろふの啼くふるさとを戀ふ

日本民族の血と手

前掲の諸論が何れも着歐後日を經ざる時の筆に成れるに反し、本論は歸朝後執筆したもので、本集中最後に成つたものである。主として西洋文明の物質的性質を有する方面を力説し、引いて日本民族の長短を明瞭にし、以て吾等が覺悟を確立せんことを期したるもの、先きに掲げし「西洋文明の分析的性質」以下の諸論と相俟つて、余が西洋文明觀の一班を成すものである。

一　序

私は戰前戰時に亙り約一箇年、白、佛、獨、英の諸國を遍歷して近頃歸朝した者であるが、外遊中常に私の遺憾に思つた事は、在外同胞の動もすれば極端なる西洋崇拜熱に冒され、縱ひ左程までならずとも、概して自ら居るに劣等人種を以てするの風ある事であつた。虛心平氣、自國の短所を棄てゝ他國の長所を採るは、日本國民の美點であるけれども、其極、徒らに自國の美風を呪うて妄りに異邦の酬俗に

心醉するが如きは、吾人の極力排斥する所である。

私は此見地に本いて外遊中も能く人と議論をした。之が爲め巴里では島崎藤村君から遂に愛國者の名稱を受くるに至つた。考へて見ると其も早や一年餘り前の事である。ポー・ロワイヤール街の一ホテルの四階で消え殘る暖爐の炭團の火を圍みながら、夜の更るをも覺えず能く高い聲を出しては四隣の眠を妨げた者である。伯林に居た時も常に語學教師を捉へては所謂愛國熱を吐いたものだ。それで件の語學教師などは、能く私の友人に向つて、ヘル河上は日本の外に國は無いと思つて居るなどゝ云つて居た。英國に行つてからも屢〳〵英人から君は英國をどう思ふと聞かれたが、私は自尊心の强い彼等に向つても何時も日本を除いたならば英國が一番好い國だと答へて居た。

遠く異邦に出でゝ遙に祖國を顧るからそんな氣分にも爲るのだと冷かす友人も居たが、歸朝以來既に百日、私は今に至るも猶其所感を變へない。好き嫌ひは別と

して、私は我が國民を以て猶大に爲すに足る國民と信じて居る。殊に今や大戰の起るに際し、今後歐洲諸國の疲弊豫想の外に大なるべきを思ふにつけて、益々我が國民の自卑の念を斥け大に其自信を固くするの切要なるを感ぜずには居られない。乃ち公務の餘暇を利用して茲に此一篇を公にする次第である。

思ふに一切の生物は遺傳及び境遇の產物である。『石の上に遺し種あり蒴出でゝ枯れたり、またよき地に遺し種あり生出でゝ實を結べること百倍せり』と云ふが如く、同じ種でも境遇の如何に依つて其固有の能力を發揮し得ると、し得ざるとがある。併し縱ひ同じ豐饒の土地に播いても種の如何に依つて實を結ぶことに又百倍の差があり得る。此理由に本づき、我が日本民族の前途を考慮するが爲には、吾等は我が民族の祖先よりの遺傳と今後の境遇に就いて考究しなければ爲らぬ。茲に遺傳の問題は卽ち血の問題である、而して境遇の問題は窮極手の問題に外ならぬ。是れ余が本篇に題して日本民族の血と手と云ふ所以、讀者にして若し許さるゝならば、以下回

を重ねて聊か管見を述べ試みん。

二　ワイルドの日本藝術觀

オスカー・ワイルドの『虛僞の衰頽』を見ると、中に日本の藝術に就いて次の如き議論がしてある。

『偉大なる藝術家は曾て事物をあるがまゝに觀る者では無い。若し爾かするならば、彼は既に藝術家たるに値せざる者である。試みに一例を現代に取らんか、余は諸君が日本の事物を愛好することを知る。今諸君は是等の藝術に現され居るが如き日本人なるものが、現實の世界に生きて居ると考へて居らるゝのである乎。

若し爾か考へて居らるゝならば、諸君は全然日本の藝術を理解せざる者である。是等の藝術に現れて居る日本人なるものは、若干の藝術家が全く自分の考へで勝手に創造した者である。諸君にして若し北齋の繪なり又は其他の日本の大家の繪

をば、現實の日本の紳士又は淑女の傍に置くならば、諸君は兩者の間に何等の類似なきことを發見さるゝで有らう。

日本に住める現實の日本人は普通の英國人と別に違つた所はないので、卽ち彼等は極めて普通の人間で、何も奇異又は異常と云ふやうな點を有つて居る譯では無い。げに藝術に現れたる日本は、全く純粹の發明である。現實の世界には、何所に行つたとて、斯る國が在る譯でもなく、又斯かる國民が居る譯でも無い。近頃我國で最も人氣ある畫家の一人は、日本人を見たいと云ふ愚かな希望を有つて、此菊花國に旅行したのであるが、彼が其日本で見得た所のもの又は畫き得た所のものは、纔に提燈と團扇位のものである。……されば諸君にして若し日本の藝術を理解しようと思はるゝならば、何も旅人の身仕度をしてまで、遙々日本に出掛ける必要は無い。それよりも退いて家に留まり、日本美術家の若干の作品に眼を曝らし、かくて其作風の精神を飲み込み、其想像的描寫の方法を會得するが何

よりである。それさへ出來たならば、何時でも宜いから、一日ハイド公園に杖を曳くなりピカヂリー街を逍遙するなりして御覽なさい。諸君は其處で必ずや日本の藝術に現れて居ると同じやうな景色なり人物なりを見出さるで有らう。若し又其處で見出すことが出來ぬならば、何所へ行つたとて見出さるゝ譯のものでは無い。』

私は一箇年餘を歐洲に費して復航の途中、地中海に於て此の一文を讀み、さすがにワイルドは面白い事を云つて居ると思つた。

三　『經濟人』

私は英國正統學派の經濟學に假定してあるやうな『經濟人』――他人と競爭して常に自己の經濟的利益をのみ追求するといふ人間――の組織して居る實際の社會を見る爲に、特に英國に留學したと云ふ譯では無いが、滯英半箇年の中、所謂經濟人なるものには遂に一人も出會ふことの出來なかつたのを、多少は意外に思はぬでも無かつた。かの大英博物館は世界稀に見る所の學問及び藝術の寶藏で、そこには殆ど世界一切の事物を網羅すと稱せられて居る。現に人間では、石器と共に葬られた有史以前の人間の屍體が其土棺と共に陳列されたのもあり、又第三のピラミッドを造つたメンカウラと云ふエジプト王の死骸も其櫃と共に陳列されてあるが、固より私は其所で經濟人のミイラを發見し得た譯では無い。又私は、一時間平均千四百三十八の車が通るといふ恐ろしく繁華なロンドン橋の在る世界最大の都會にも住み、又或時は人家僅に二三十、飯屋も床屋もないと云ふやうな物寂しい田舍にも住まつて、若干の英人と暫く往來を續けたこともあるが、併し私は何所へ行つたとて、固より其等の場所で生きた經濟人と談話を交換し得た譯では無い。オスカー・ワイルドは更に面白い事を云つて居る。

『過去十年間に於て倫敦の氣候に異常な變化が起つたのは、全く藝術界に於ける或

る一派の作用である。かく云へば諸君は嗤はるゝで有らう。併し……物が在るのは、吾々が其を見るからである。さうして吾々が何を見又如何に見るかは、吾々を支配する所の藝術に依つて決まる。……今日では凡ての人が此倫敦の霧を見る、併し其は霧が在るから見るのではなくて、詩人や畫家が其美を敎へて呉れたから始めて之を見るに至つたのである。恐らく此倫敦には昔から霧が在つたので有らう。いや確に在つたのである。併し何人も其を見なかつたからして、吾々は何も其に就いて知る所がなかつた。卽ち是等の霧は、藝術が之を發明するまでは存在しなかつたものである。……』

ターナーが霧を描いた爲に始めて倫敦に霧が出來たと同じやうに、**ロセッチ**が、夢見る如きミスチックな眼、大理石像の如き長き咽喉、奇妙な四角の顎、影の如き緩やかな髪を有つた女を描いてからと云ふものは、さう云ふ女が人の眼に着くやうになつた。又さう云ふ女が珍重される爲に、人が成るべく其型を眞似るやうにも爲

つて、事實さう云ふ女が殖えて來た。つまり大藝術家は一の型を發明するので、人生は却て其を模倣するのであると云ふのが、**ワイルド**の議論であるが、げにさう云ふ見方から見れば、矢張、かの經濟人なるものも亦、學問上の天才が書齋裡に在つて發明した一の型と云ふ事が出來やう。現に英國正統學派の鼻祖と稱せらるゝ彼の**アダム・スミス**の如きは、鄕里の**カーカルディー**と云ふ田舍町に長い間引込んで居て、或る日曜日の朝などは、着物を着換へる前、寢衣のまゝで庭を散歩しながら、何時の間にか知らず識らず本通りへ出たまゝ、十五哩も遠方の**ダムファーライン**と云ふ所まで來て、寺の鐘が鳴るので始めて我に歸つて、驚いて家に戻つたと云ふ程な世間見ずの考へ込んだ生活をして居たものであるが、畢竟ずるにかの經濟人なるものは、斯かる生活の中から彼の發明に依つて机の上に產れ、著書の中に生きて今日まで來つたものと見られぬ事もあるまい。されば旅人の身仕度をして遙々英國まで行かんでも、一度この大阪なり神戸なりの實業家と商談を試みたならば、吾等は自分の鄕

土に於ても、或る意味に於て多くの生きた經濟人を見ることが出來るであらう。

四　人間の茶碗と犬の茶碗

然り、『經濟人』なるものは英國の天才が發明した一の型に過ぎぬで有らう。併し人間の空想には自ら限りがあつて、天使と云つても人の兒に翼を附けただけのものになり、鬼と云つても人の顏に角を生やした位のものである。されば浮世繪の發明された日本の山水が、油繪の起つた歐洲の自然と自ら其趣を異にするが如く、經濟人の發明された歐洲の社會は、大黑天の祭らるゝ日本の世態に比べて、見方に依つては又酷く違ふところもある。

私は伯林では或る素人下宿に居て、食事は大概家族の人と一緒に取つて居たが、其時頗る奇異に感じた事が一つある。と云ふのは其處の家では犬を飼つて居たが、食事が濟むと吾々の使ふ皿の上へ肉の片を入れて、其を机の下の床に置いて、ち

かに犬に食べさすのである。日本では、犬の食事と云へば緣側の下の土の上へ壞茶碗など置いて、其に魚の骨や殘飯を入れてやるので、人間の茶碗と犬の茶碗とは乞食でも區別して居るのであるが、其があちらでは丸で一緒である。きたないでは無いかと苦情を云つて見ても、どうせ後で洗つて、使ふ前には熱するのだから、衞生上何も差支は無いではないかと辯護するだけで、きたないと云ふ意味が如何しても通じぬ樣子であつた。お蔭で私は前後百餘日獨逸の犬と食器を共にするの光榮を得た。

其後私は倫敦に行つたが、其處ではさる英人と餘程懇意になつて、隨分立ち入つた風俗人情上の事をも遠慮なく尋ぬる便宜を得た。そこで或日、私は例の犬の食器に就いて質問を發して見た。一體こちらでは食事の濟んだ後、吾々の使ふ皿の上へ食べ殘しの肉など集め、其を床の上に置いて、ぢかに犬に食べさして居るやうだが、君はあゝ云ふ習慣を如何考へる、日本では決して仕ない事だがと、少々先方の風俗を冷笑するやうな口調で尋ねて見ると、其英人の云ふには——英人は殊に自尊

心が強い――其はこちらでは善い習慣と云へぬ、殊に上等社會では決してやらぬ事だと云ふのである。そこで私は考へさせられた。人間の皿と犬の皿と一緒にすると云ふ事は、西洋でも矢張り下等の人のする事と見える。下宿屋で毎日見て居たから、西洋では一般にさうしたものかと思ひ定めて居たが、もう少しで誤解したまゝに濟むところであつた。百聞一見に如かずと云ふが、時には一聞百見に如かずと云ふ事もあるものだと感じた次第である。

併し猶念の爲にと思つて、君がさう云ふ事を善くない習慣だと云ふのは、其は如何いふ理かと更に尋ねて見ると、其返事に、其は絨氈を汚すからだと云ふ事である。何だ、それで上等社會では特にやらぬと云ふのか、其では吾々日本人と君等歐羅巴人とは矢張り物の考へ方が大分違つてゐる、人間の食器と犬の食器と一緒にするのが惡いと云ふのが僕等の考へで、つまり僕等日本人の考へから云ふと、吾々の使つて居る皿を犬に嘗めさせては、皿が根本からきたなくなつて最早役に立たぬと云ふ

事になる、いくら其を洗つたとて熱したとて、一旦犬が嘗めた後は皿が穢れて仕舞つて最早人間の箸を着けべきものでは無いと云ふのが吾々の考へであるが、君等にはそんな考へは無いかと云つて尋ねると、其英人が眼を圓くして、そんな事は是迄考へて見た事も無い、犬が嘗めたから皿が穢れて人間には使へなくなるなど云ふことは、考へようと思つても考へられぬ事であるが、日本人と云ふものはそんな事を本當に考へるのか、其は實に珍らしい事を聞いたと云つて、大變に悅んだが、私自身も此の一場の會話に頗る興味を有つて、今も猶忘れ得ぬ次第である。之は單なる一例に過ぎぬけれども、此一例に依つて見ても、我等の思想及び感情と彼等のそれとの間には如何に大なる裂目があるか〻能く分る。我等と彼等との間には親しい血の續きは無い。彼等は飽くまで物質的であるが、我等は如何にしてもそんな物質的の人間にはなり得ないのである。

五　西洋の便所

神戸出發以後五十餘日の航海を終つて始めて倫敦に着いた時は、私は全く獨りであつた。どうせ吉田山の鼠が世界第一の大都會に出た事であるから、多少の失策は固より覺悟しながら、着く匆々豫て聞き及べるエストミンスター寺院に單身見物に出掛けて見た。ところが院内の光景豫期に優りて床しく私は時の移るをも覺えず、ダーヰン、ワット、フオーセットなど自分の學問に關係のある人々の記念牌や記念像の前に立つて恣に種々の感想に耽つて居たが、暫くすると或る生理上の必要に迫られて來たので、已むなく其處を出た。出てから暫くは其近所を尋ねて見たけれども、容易に其られしい物も見付からぬ。聊か當惑したが、元來人に物を訊くことの嫌な私のことゝて、直ちに一計を案出して、兎あるカフエーに驅け込んだ。然るべき所に椅子を占めカフエーを飲みながら、何れWCの字の下に手を描いて方向が指

さして有らうと頻りに氣を配つて見たが、喫煙室は階下に設けありなど云ふ注意の外には不幸にして何物も發見出來なんだ。生憎カフエーを飲んだので生理上の必要は愈々切迫して來た。益々當惑しながら匆々に其處を立ち出づれば、場所は丁度トラフアルガル廣場のことゝて右手には美術館がある。扨斯かる建物にこそ見易き場所に然るべき設備あること必定なりと、一應は安心しながら入場はしたものゝ、固より他に目的あることなれば、ラフアイエル、チチアン、ボチセリなど久しく名のみ聞いて今始めて接する古人の大作にも目も呉れず、次第に足を早めて室から室にと通り抜けて見たが、悲しい哉徒に『淑女』のみあつて一向に『紳士』が無い。遂に當惑の極再び其處を這ひ出で直に自動車に飛び乘つて自分のホテルに歸り着き、漸く目的を達して全身の汗を拭いたのは、考へて見ると私の留學生活の第一頁で、外遊中私の最大傑作の一であるが、其後伯林に行つてから友人に聞くと、嘗てさる紳士が所用あつて件の場所に入らうとすると、一方には『入れん』(Herren＝男)とあ

るので當惑しながら他方へ窺くと、其處には又『駄目』(Damen＝女)とあるので愈〳〵當惑したと云ふ話である。之も私のに劣らぬ傑作である。が併し之は恐ら〳〵僞作であらう。

餘談は扨措き、私は件の失策から特に注意したと云ふ譯では無いが、萬事規則正しく整頓して居て、殊に清潔の點に於ては世界第一の都會と謂はるゝ伯林にでさへ、ヘレンにもダーメンにも、所用の後手を洗ふべき設備の無いのは不思議である。併し能く注意して見ると、實は不思議でも何でも無い。元來西洋人は用を辨じた後で手を洗ふことをせぬのである。日本ならば如何なる茅屋にも、便所のある所には必ず水と手拭が備へ付けてある。その手拭は時とすると隨分垢じみて居て、其を使用しては却て衞生上善くないかも知れぬのであるが、兎も角吾々は、手に水を掛けて拭いてさへ置けば、其で不淨を拂つたと云ふ氣持になる。卽ち吾々の考へ方は、どうしても科學的でない。

抑も科學といふものは物質的の見方をするのが其本領であつて、——だから心の働きを研究する心理學でも、其本質に於ては全然物理學と選ぶ所は無い——今日でこそ日本にも廣く行はれて居るが、本來は西洋人の學問である。其西洋的學問、卽ち西洋人の見方から云へば、人間の食器と犬の食器と一緒にしても、熱湯で洗へば差支ない事になる、便所に入つて手を洗つても、汚い手拭で拭いては、科學的にいふと却て衞生上善くないと云ふ事になるのである。雷に便所のみでは無い。日本では山村水廓到る所の神社佛閣に必ず手洗水の設けがある。併し西洋では如何なる寺院にも如何なる本山にも斯る設備のあつた例は極めて少ない。私は、日本人と西洋人との考へ方の根本的の相違が是等の例にも能く現れて居ると思ふ。如何にしても西洋人は物質的の人間であるのである。

六　國家か金貨か

私は今度の大戰の始まつた時は丁度伯林に居たが、其時忽ちにして凡ての金貨が市場から影を隱したと云ふ一事を見て、私は彼我國民性の相違の著しいのに驚いた者である。日本と違つて彼方では平生金貨が流通して居るが――日本の如く金貨の流通せざる金本位國は歐洲に其例が無い、其を日本の國辱の如く思ふは大變な間違ひであるが、餘談なれば玆に省く――其が開戰と同時に皆姿を隱した。一時は銀貨まで無くなり、札ばかりで煙草を買ふにも困つた事があるが、是は皆萬一の場合を虞れ爭うて金銀貨を貯へ込んだ爲である。銀行劵の受領を拒みたる商店は發見次第直に其營業を停止すべしと云ふ命令は出たけれども、釣錢が無いと云ふを口實に容易に札を受取らなかつた。其が國を擧げて存亡の大戰を始めた首途の光景である。

倫敦でも私は素人下宿に居たが、其時甚だ不思議に感じたのは、獨逸の飛行船が來襲したと云ふ記事が新聞紙に出る毎に、宿の主婦が銀行に驅け付けては、貯金を金貨で引出して來ると云ふ事であつた。何か事が起ると、兎も角金貨だけは掴んで

置かねば爲らぬと云ふ考へが、最先に浮かぶものだと見える。是はまさかの場合には、米國なり加奈陀なり濠洲なりに逃げて行つて住まふと云ふ考へからだらうと思ふが、斯る點に於ても吾々日本人の考へは丸で違ふ。一二の例外は有らうが、先づ日本人ならば國が亡ぶと云ふ事を考へない。國が亡びた後の自己の生存と云ふ事を考へない。若し國が亡ぶならば、吾々は其より前に此祖國の爲に血を流し此郷土を枕として皆討死するのであらう。だから日露戰爭の際に於ても、吾々は金貨を貯め込むどころの話では無くて、却て反對に金の指環まで中央銀行に提供しようとした位である。國家の大事に當つて先づ金を掴むと云ふ物質的の人間に比べると、大分種が違つて居る。

併し考へて見ると之には少からず境遇の影響も有らう。と云ふは、西洋では英、佛、獨、露、米と云ふが如く互に境を分ち國を立てゝ居るものゝ、先づ衣服、食物、住居の類は皆大同小異である。どこの國に行つて見ても、皆洋服を着、洋食を食ひ、

洋館に住まつて居る。だから男にしても、女にしても、老人でも小供でも、何時何處に引越をするにも左したる不便は無い。私は嘗て伯林に轉學する途中、一度佛獨の國境を越えた事がある。ナンシーを經て暫らくすると、そこが國境だと云ふので、稅關の檢査のため汽車が停つた。しかし山一つ川一つあるでも無い。東海線又は山陽線に乘つて縣の堺、郡の堺を通るより猶他愛なきものである。歐人の互に國を分つ所以、吾等が東海の孤島に國を樹つると、固より同日の談では無い。言葉にしても無論國に依つて違つては居るが、しかし隨分似寄つた所もある。現に佛領から獨領に入ると、如何にも圓く滑らかで和かであつた佛蘭西語が、急に角の多い尖つた烈しい獨逸語に變つては來るが、併し、一例を擧ぐれば、日本でお早うと云ふ所を佛蘭西語でも獨逸語でも乃至英語でも皆な一樣に善い朝と云ふ。さうして英語ならばグド・モーニングと云ふ所を獨逸語ではグーテン・モルゲンと云ふやうに、其發音までが似通つて居る場合が多い。一二三といふのでも、英語ならばワン・ツー、

スリー、それが獨逸語ならばアイン、ツワイ、ドライ、佛蘭西語ではアン、ヂエ、トロワと云ふのだから、其差は東北の訛と九州の訛との違ひにも及ばぬ位の事である。況や國によつては全く同じ言葉を使つて居る所もある。假へば白耳義や瑞西の一部では佛語を使つて居るし、英國と米國とは同じ英語を使つて居る。其上又皮膚の色が大方同じであるから、互に結婚することも比較的容易であつて、現に今日大戰に參加しつゝある英獨露等の皇室が互に深い姻戚の關係になつて居るのでも、其一斑が分る。斯樣な次第であるから、例へば英人にしても、自分の國が亡びたならば、米國に渡つて住むと云ふに左したる難儀は無い。大阪から東京に引越すと云ふ位の話で、大事なのは唯だ金だと云ふ事になる。單に此點のみから考へて見ても、日本人の國家觀念と西洋人のそれとは相違しなければ爲らぬ筈である。西洋に個人主義的の考へや世界主義的の考へが比較的強いと云ふのも自然の道理である。此國情の差異を辨へずして妄りに西洋思想の輸入を事とするは、吾等の切に愼まねば爲らぬ所

である。否な花は移し植ゑても匂は失せる。此國土に西洋そのまゝの思想の育つべき筈がない。元來西洋人は椅子に腰を掛けて居る國民である。吾等が活動寫眞を見に行つて居る時と同じ樣子に、彼等は皆な其祖國に腰を掛けて居るのである。吾等の如く本來坐つて居る國民では無い。境遇も違ふが、人種も違ふ。

七　西洋の物質文明

之を要するに、西洋人は物質的の人間である。――私が西洋人と云ふは、全篇を通じ主としてチユートン人種の血を引ける英佛獨等西歐北歐の民族を指す。――哲學の上に於てこそ、或時は唯心論が行はれ、又或時は唯物論が行はれると云ふやうに、樣々の變遷はあつたけれども、民衆全般を支配して居る本流の思潮は飽くまでも物質主義である。現にチユートン人種の爲に大氣焰を吐き大自負を述べたチエンバレンの『第十九世紀の基礎』にも――此書は非常に獨逸皇帝の氣に入つて、

之が爲數千部を御買上になつたと傳へられて居る――『支那人となる』の危險は吾等の文明にとつて最も恐るべき點である、『殊に獨逸人は種々の點に於て、例へば其の積集の貪慾に於て、物質を累積すると云ふ點に於て、文字の爲に精神を等閑に附せんとするの傾向等に於て、支那流に傾く危險が特に多い』と明言して居る位である（通俗版八九二頁）。固より西洋人には色々の特徴があるけれども、兎も角物質的であると云ふことが彼等の最大特徴の一である事は、恐らく何人も異論なき所であらう。同じ東洋人でも吾々は此點に於て大に支那人と違つて居る積りである。西洋人とは無論根本的に違つて居る。

此の如く西洋人は由來物質的の人間である。されば彼等の間に於て――物質的であると云ふ外に更に種々の長所を兼ね有せる彼等の間に於て、物質的の學問たる科學が發達し、著しき經濟上の進歩、驚くべき富の集積が行はれたと同時に、此點に於ては彼等と正反對の傾向を有する吾等日本人の間に於て、物質的の文明が非常

に後れて來たと云ふ事は、之は國民性の差異に基く自然の結果で、必ずしも深く悲觀するに及ばぬ事である。

彼等は物質的の人間であるから、其物質的の方面に於て非常なる發達を遂げた。その代り吾々は又日本人として別種の方面に特色を發揮して居る。自ら西洋人の及び難い長所を有つて居る。現に前回に述べたる如く、彼等は犬と皿を同じうして汚いと感ずることの出來ぬ人種である。便所に入つて手を洗ふ事を發明し得ぬ人種である。是等は極めて卑近な例であるけれども、かう云ふ事が宗教、道德、人情、風俗、學問、藝術、其他の各方面に現はれて居る。例へば英語では自分の事をアイと云ひ他人の事をユーと云ふだけで、之に代るべき言葉は外には無いが、其が日本語になると、自分の事は僕と云ひ、私と云ひ、己と云ひ、吾人と云ひ、吾輩と云ひ、余輩と云ふが如く、他人の事も或は君と云ひ、アナタと云ひ、貴樣と云ひ、御前と云ひ、實に樣々の言葉があつて、其使用には場合に應じて一々適不適がある。其微

妙なる區別に至つては殆ど言語の道斷ゆと云つても宜い。日本の有識者間には日本語に對して隨分非難の聲もあるやうであるが、私の考へに依ると、或方面ではとても西洋語とは比較に爲らぬほどの進歩をして居て、餘りに進歩して居て却て不便を感ずる現狀であると思ふ。日本特殊の道德、人情、風俗、自ら是等言語の端にも現はれて居るでは無いか。西洋人が吾々の有たない特徴を有つて居るからとて、吾々は何も甚く卑下し悲觀するには及ばぬ事である。

併し維新の前後に於ては、吾々は一般西洋の文物が物質的分量的に偉大なる發達をして居るものを見て、少からず驚き且つ恐れたものである。其結果吾々日本人は西洋人に比べて到底劣等人種たるを免れぬ者である、日本人の血が駄目なのであると云ふやうな、自卑自屈の思想が起つて、現に明治十九年頃の時事新報は日本人種改良の方法として、吾々は優等人種たる彼の西洋人と盛に結婚して大に混血兒を拵へねば爲らぬ、其以外に日本民族發展の方法は無い、と云ふ事を主張するほどの有

樣であつた。其結果であるか如何か知らぬが、昔は夷狄の物だから穢れると云ふので道を横切る時にも電線の下では扇を頭に翳して通つた程の日本人が、今日では大分西洋人と結婚する人も出來たやうである。之は果して日本人種改良の目的で行はれて居るのか如何か、其は詮索の限りでないが、何れにしても私の考へに依れば、我國の物質的文明を發達さす爲には、何も日本人の血を變へて懸る程の必要は無いと思ふのである。

元來日本人の血はそんなに惡い血では無い、寧ろ日本人は世界稀に見る優等人種だらうと思はれる理由がある。少し理窟になるが、以下其大體を述べさして下さい。

八　優等人種は如何にして生ずるや

チエンバレンの『十九世紀の基礎』が非常に獨逸皇帝の氣に入つた本であると云ふ

事は、私の既に一言した所であるが、此書は要するに人種と文明との密接なる關係を高調したもので、即ち今日世界の文明を代表しつゝある歐羅巴文明なるものは畢竟チユートン人種の作り出した文明であつて、他の人種の到底企及すべからざるものであるから、所詮吾々チユートン人種が世界を征服するは、天の命ずる所にして神慮を安んずる所以であると云つたやうな事を、高い調子で主張したものである。

試みに其一斑を例示せんか、彼曰く

『自然を機械的に解釋することは避くべからざる事で、其が唯一の眞である。尤も余が玆に唯一の眞と云ふは、吾等チユートン人種にとつて唯一の眞と云ふ意味である。他の人種には——過去に於ても將來に於ても——別種の見方が有るであらう。又吾々の間に於ても純粹なる機械觀が餘り極端に流行して來ると、之に對して時折反動が起るともある。併し是等一時的の變調に依つて誤解しては爲らぬ。吾等チユートン人種は絶えず必然的に機械觀に復歸して來るのであつて、又吾等

チユートン人種が勢力を有する限りは吾等は此見方をば非チユートン人種の上に強制するのである』（通俗版九二三頁）

人間の茶碗と犬の茶碗と一緒にしては汚いなどゝ云ふは、お前達日本人の謬見である。犬と皿を共にしても熱湯で洗へば差支ないと云ふ考へ方を、お前達日本人にも強制的に注込んで遣らうと云ふのである。彼又曰く

『北歐羅巴より放射して今日世界の大部を支配しつゝある文明及文化は吾等チユートン人種の事功である。……此事功は今日迄人間の成し遂げ得たるものゝ中疑ひもなく最大のものである。そは人道てふ迷想に依るに非ず、只健全なる利己の力に依つて遂行されたものである。……チユートン人の跋扈が地球上の全住民にとり果して幸福であるか否かは、更に吾等の關知せざる所である。昔より今に至る迄チユートン人は自己の場所を作るが爲に、他の種族及人種の全部を或は虐殺し、或は根本的に之を腐敗せしむることに依つて漸次死滅せしめたものである。チ

ユートン人は只其美德に依つてのみ、而して毫も其惡德——例へば貪慾、殘虐、姦邪、自己の支配權の外は一切他人の權利を無視せんとすること等の惡德——に依ること無くして勝利を得たりと云ふ事は、如何に鐵面皮の人と雖も之を是認するに躊躇するで有らう。乍併之と同時に、彼等チユートン人種が最も殘虐に振舞ひし所に於ては、到る所彼等は之に依つて最も高く最も道德的なるものに向つて最も確なる基礎を置いたと云ふ事は、何人も否認し得ざる所である』（通俗版八六四頁）

皮下血ある底の日本男兒は是等の文を何と見るか。彼は論じ去り論じ來つてチユートン人種の爲最も露骨に最も大膽に其抱負と自信とを述べ、かくてチユートン人種を以て古今に絶する神の寵兒と爲すに至る。然らば如何にして此の如き神の寵兒は出來たか。

彼は特に優等なる人種の成立する條件として（一）本來優等なる人種の存在すること（二）其人種は引續き他と血を混へざること（三）之と同時に絶えず人爲淘汰の行は

れ居ること(四)元若干人種の混合に依つて成り立ちし人種たること(五)但し其人種の混合は、若し其人種が別種の型に屬するものならば、極めて短時間に行はれ、其後は引續き嚴重に他と血を混へざることの五箇條を擧げ、猶彼は之を論證するために、先づ種々の動物殊に家畜に關する實驗上の事例を列擧し、又古來文明國の盛衰と其人種の構成及び其變化との關係を說明し、更に現代の諸國に就て其國勢と人種との關係を論じて居るのである。是等の點に就ては研究の餘地が猶澤山に殘つて居るけれども、彼と略同樣の意見を有せる者には、獨逸に在つては彼に先んじてライプマイヤーあり、佛國にはゴヒナウあり、英國にはチヤツタートン・ヒル、アーサー・トムソンあり、米國にはシユルツ等ありて、余も亦彼と略意見を同じうする者である。

近頃(六月二日及三日)大阪毎日新聞を見るに犬の事が連載されて居る。其に依ると『秋田犬は今以て外國種の血を一滴も混へて居ない純粹の日本系統を保つてゐる』が、之が鬪犬としては日本で一番强い犬だと云ふ事である。又斯う云ふ事も書いてあ

る。『秋田地方でも大館町が秋田犬の本場で、同町では町民間の掟で一切洋種犬を飼はない、何かの機みで西洋臭い犬が紛れ込まうものなら、町内の犬と町民とが一つになつて此素性の知れぬ放浪者を數里外へ追拂つて了ふ』とか『我々日本人が飼養する犬としては之に優る犬は無いのであるが、困る事には件の大館以外では一代で雜種になり、而も其が姿の醜い混血兒になるので、誰しも秋田犬の名に懷しみを寄せながらも飼育する人が尠い』と云ふ事が書いてある。妄に血を混ぜるのは善くないと云ふ事は此一例でも分る。

所が此秋田犬の外に今一つ善い犬は土佐犬であるが、之は現在では世界的の混血兒で、第一には英國のブルドッグの血を混ぜて其意地の强いと云ふ長所を取つた。併しブルドッグは體が小さいので、其點を改良するために更にアルプスの深山で雪中旅人を救ふので有名なセント・バーナード種の血を混ぜた。斯樣にして三度目は米國のマスチーフ、次は獨逸のグレートデンの血を混ぜ、さうして出來上つたのが

今日の土佐犬であると云ふ事である。

扨て前に述べた秋田犬の祖先は如何して出來たか分らぬが、此土佐犬の例を見ると、どうしても善い血を混ぜなければ善い種は出來ぬと云ふ事が分る。併し一旦善い種が出來たならば、其から後は嚴重に他と血を混ぜないやうにしなければ爲らぬと云ふ事は、先の秋田犬の例で能く解ると思ふ。

九　尊き日本民族の血

之を要するに、優等人種の出來上る爲には、先づ種の善い人種が居て其が他と血を混へ、而して一旦血を混へた後は嚴重に他と隔離して其血の純潔を保つと云ふ事が必要である。所が前に述べたチエンバレンの説に依ると、今日北歐羅巴に居る英佛獨等の諸國民殊に英國民は恰も是等優等人種の出來得る條件をば最も善く具備して居る。されば是等の歐羅巴人が今日の世界で最も卓越した優等人種となり、かく

て彼等が現時世界の文明を代表するの地位に立ちつゝあるは何も不思議はないと云ふのである。諸君の知らるゝ如く、今日の英國人なるものは種々なる人種の混合より成立つて居る。卽ちあの島の先住民はケルト人であるが、紀元前後に當つてはローマ人が侵入し、更に紀元後第七八世紀に亙つては歐羅巴の西北の方面よりチユートン人が入り込んで來て、是等の者が互に混合して遂に今日の英國人なる者が出來上つたのである。併し英國は島國であるから、他人種の侵入といふ事は絕えず起つて居るのでは無くて、多少の例外は無論あるけれども、大體に於て約八百年このかたは、他と隔離して血を混へずに行くことが出來た。卽ち今日の英國に於ては嘗て人種の混合が行はれた、併し一旦其混合が行はれた後は、島國である爲に他と隔離して、引續き血を混へると云ふ事は無かつた。それ故今日英國は歐洲でも特に第一等の大國となり得たと云ふのが、チエンバレンの議論である。

扨此議論は、論者自身が認めて以て、貪慾、殘虐、姦邪、自己の支配權の外には

一切他人の權利を認めざる如き種々の惡德に依つて、自己の領域を擴張しつゝありと爲す所の彼のチユートン人種が、神の特別なる恩寵者たる事を立證する爲に書かれたものであるが、今之を私の立場から見ると、折角彼がチユートン人の爲に氣焰を吐く積りで拵へた千頁に餘る此著書は、恰も日本人の爲に其自信と其自覺を喚起する積りで書いて呉れたものなるかに感ぜらるゝのである。

何故と云ふに、吾々日本人なるものは所謂神代の昔に血液の大混合をやつた者である。如何なる人種が如何なる方面より如何なる徑路をとつて來たか、其詳細の事實は未だ正確に研究されて居らぬけれども、神話の研究其他に依つて、ずつと昔に色々な人種が此島國に寄り合つたと云ふだけの事實は今日疑ひを容るゝの餘地は無い。然るに一旦此血液の大混合の行はれた後は幸ひにも吾々の祖先は永く此孤島に立て籠つて、早くより日本國家を組織し――其國家統一の大業は崇神天皇の御宇に行はれたと云ふのが私の意見で、委細は拙著『經濟學研究』の中に論じて置いた――

其後は曾て一度も異國人の侵入又は征服を受けたること無く、爾來實に二千餘年の久しきに亙り、永く血液の純潔を維持して以て今日に到つたものである。思ふに此の如く永く其血液の純潔を維持し來りたる事は、吾々をして始めて今日の日本人たらしめし所以である。されば二千五百年來萬世一系の皇室を奉戴して居ると云ふ事は、決して吾々の意味なき虛榮では無い。『開闢以來異國の敵に、一度もこれまで汚されざりし、尊き海岸守れや守れ』と云ふ軍歌の一節は、決して吾々の空しき矜持を歌つた文句では無い。『ふる亞米利加に袖は濡さじ』と歌ひし纖弱き婦人の血管にも二千有餘年其純潔を保ち來りし日本民族の血が流れて居たのである。種々なる血液が絶えず流れ込んで居る所には決して感情及思想の國民的統一を見ることは出來ぬ。吾々が今日、日本人獨特の鞏固なる國民性と國家とを有ち得るに至つたのは、全く吾々の祖先が久しく其血液の純潔を維持し來つた爲である。要するに吾々は嘗て人種の大混合を行つた。而して一旦其混合を終へた後は、今日に至るまで既に二千餘年

の久しきに亙つて永く其血液の純潔を維持し來つたのである。されば日本人位優等人種成立の條件を完全に具備した者は、東洋は勿論全世界に於て其例を見ぬのである。髪の色、眼の色、皮膚の色に於ては、吾々は新附の朝鮮人に酷似して居る、又隣國の支那人とも大差は無い、乍併過去二千年の歴史に於て彼我の間には雲泥の差異がある。

ジョルダンの云ひし如く、一國民の血は其歴史を決定すると同時に、一國民の歴史が又其血を決定する。同じ色の皮膚の下に同じ色の血が流れて居るのだけれども、其血の歴史、其血の品質に根本的の差異がある。是れ我日本人が獨り此東洋に於て今日第一等の強國となり、驚異すべき特種の文明を發揮しつゝある所以である。只元の種が彼の歐羅巴人に比較し、果して優り居りしや劣り居りしやと云ふ點に至つては一の疑問であるが、萬一元の種まで善かつたと云ふ事であるならば、其こそ我日本は今後益々發展して、遂には必ず世界第一等の國と爲るべき天佑を保持して居ると謂はなければ爲らぬのである。今私は此天佑を信ずる、此天佑の空しからざらん事を祈願する者である。

十　混血雜婚の弊

今飜つて更に歐洲諸國の現狀を見るに、最近數十年來汽車、汽船等交通機關の發達に伴うて國際的の結婚は次第に其數を增加しつゝある。殊に本來が前述べたる如く風俗習慣言語等の大同小異の間柄であるから、色々の具合に血液の混合が行はれて來て、現に今回の戰爭に於ても種々複雜な面倒な問題が起つて居る。例へて云へば、獨逸人で英人を妻として英國に住まつて居た者が、戰爭が始まつた爲に今は獨逸に歸つて英國を征服する爲の軍隊に加はつて居るとか、或は獨逸人と英人との混血兒が佛蘭西に住まつて居て、其が佛蘭西人を細君にして其國に歸化して居る爲に、今は佛蘭西軍に加はつて獨逸兵と戰つて居るとか、其他種々奇怪なる現象を生

じて居る。思ふに若し妄りに血を混へる事が人間の種を惡くする原因であるならば、今日の歐羅巴人は此の如き無謀なる血液の混合の爲に、次第に多少の退化を免れ得ぬであらうと信ずる。

日本第一の鬪犬たる秋田犬は今以て外國種の血を一滴も混へない純粹の日本系統の犬であるが、一旦之に他種の血を混へると、一代で姿の醜い雜種になると云ふ事は、私の先きに述べた所である。思ふに此の如きは啻に犬にのみ限る譯では無い、人間に在つても血を汚すことの恐るべきは之と同樣である。シユルツの著書『人種か雜種か』は其書名に割註して『古代諸人種興亡の小史』、國民の衰亡は他人種との雜婚に歸因すと云ふ學說、國民の力は人種上の純潔に歸因すと云ふことの證示、米國は其移住民を嚴重に制限するに非ざれば早く衰亡すべしとの豫言』と題せるにても明かなるが如く、此問題に就て許多の史實を列擧して居るが、今一々之を紹介するの餘白は無い。只試みに現時の狀態に就て其の一例を擧げんか、南米諸邦の如き

は則ち雜婚の弊を最も極端に暴露しつゝある實例と爲すに足る。殊に無形的及有形的文化の程度が其雜婚の割合と逆比例を保てるの事實は、特に注意すべき現象である。

例へば文化の稍見るべきものあり政治組織の稍整頓せる智利に在つては、雜婚の弊未だ其極度に達せず、現に人口の約三割は猶純粹なる西班牙人の系統に屬すれども、之に反し道德的並に經濟的の破產に瀕せる祕露に在つては、純粹なる歐羅巴系統の血液を維持せる者は殆んど皆無であつて、人口の全部は、印度人、西班牙人、黑人、支那人間の混血兒及是等混血兒同志の結婚より成れる雜種から成り立つて居る。是等一二の例に徵するも、妄りに血液を混合する事の如何に恐るべきものなるかゞ分る。是れ余が、現時の歐羅巴に於ける國際的結婚の增加を以て、彼等の文明のため決して喜ぶべき現象に非ずとする所以である。

十一　戰爭と血液の損害

所が今度は此歐羅巴人の仲間で未曾有の大戰爭が起り、今までの歴史に類例の無い慘酷な戰鬪を續けて、今や夥しい人間を殺し合つて居る最中であるが、之が又歐羅巴人の血の上に起れる一の大問題であると思はれる。抑も一民族の種が變る大原因に二つある。一は他の民族の血が混ると云ふ事で、一は其民族の血の或部分が戰爭其他の原因に依つて廢ると云ふ事である。而して今や此二大原因は、歐羅巴の全局に亙つて頗る大規模に實現されつゝあるのである。

嘗てアーサー・クナップは『封建的及近世的の日本』と題する一書を著し、其中に於て、二百餘年の間所謂幕府時代を通じて平和を享受し得たる日本人――二百餘年の久しき刀を鞘に收めて戰爭の實習を怠つた日本人が、日清、日露の戰役に於て偉大なる戰鬪力を發揮したのは、維新以來此國民の爲し遂げたる異常なる文明の進歩

と共に、一の奇蹟として實に驚歎に値すと論じて居るが、其をジョルダンが批評して、何も不思議は無い、日本人は二百餘年の太平を享受したればこそ、今日始めて此の如き有力なる武國と爲るを得たと云つて居るのは(『國民の血』參照)、私の誠に感を同じうする所である。

戰爭が多くの人を殺すと云ふ事は誰も氣の着く所である。併し其は一代限りの事であるから、實は深く憂ふるに足らぬ。誰も氣の着かぬ所で實は最も憂ふべき點は、戰爭のために强い種が無くなり人種が永久に弱くなると云ふ事である。

此事は日露戰爭に就て考へて見ても能く分る。此戰爭のため吾々はどれだけ貴重な種を絶やしたか分らぬ。現に中學校時代、高等學校時代の私の同郷の友達で將來有爲の人物と思はれた人々は、此戰爭のため殆ど悉く戰死して其子孫を遺さず、却て私如き弱蟲が生き殘つて子孫を繁殖して居ると云ふ有樣である。固より强い人のみが尊くて、弱い人は凡て役に立たぬと云ふ譯では無い。力のある强い人にも卑

しい愚な人が居り、力の無い弱い人にも尊く賢い人がある。乍併體力の強い人間が最も大切な國民の成立要素の一であつて、其子孫が永久に斷絶すると云ふ事は國家の一大損失たるは、言ふを待たぬ所である。私は鄕里に歸つて祖先の墓に詣づる序、陸軍中尉正何位勳何等功何級何某之墓といふやうな年若い當年の戰死者の墓標を見る毎に、我民族の血の永遠の損失を悲むの情に禁へざる者である。

十二　乃木伯爵家の斷絶

日露戰爭の日本民族の血に及ぼせる損害に就き、何人も直ちに首肯すべき最も顯著なる實例を擧げんか、乃木伯爵家の斷絶の如きは卽ち是である。多くの人々は乃木大將の死を悲しんで、乃木家の斷絶を悲しむに暇なき樣子である。乍併大將の死も惜むべき事には相違ないが、大將の血統そのものが絶えたと云ふ事に比ぶれば猶ほ惜むに足らぬ事である。乃木大將も人であれば、どうせ一度は死ぬべき人であ

る。其が十年乃至二十年早まつたとて既に爲すべき仕事を爲し終へられた後は、國家の大局から見て實は左程までの事でも無い。其よりも國家の爲に最も惜むべきは、大將の如き尊むべき人格者が不幸其子孫を遺さずして薨去された事である。大將の血が永遠に失はれたと云ふ事である。是こそ實に我國民が千萬年に亙つて到底恢復することの出來ぬ血液上の大損害である。惜むべき其血は大正の初頭大將自身が赤坂邸内の疊の上に流された血では無くて、其より既に數年前、日露の戰ひに大將の二子が滿洲の野に流された其血である。斯かる犧牲は萬已むを得ざる場合の外、絶對に避くべきものである。

私は此意味に於て今度の日支交渉問題が成功失敗如何に拘らず兎も角血を流さずに落着した事を、國家の爲大に慶賀した者の一人である。吾々は日清、日露の兩役に於て既に過度の血を棄てた。此上は最早十分に愼まねば爲らぬ。戰爭ばかりして居て、強い丈夫な人間の種を段々に絶やして行つたならば、一時は諸國を征服して

武威を世界に振ひ得たとしても、其國は遠からずして衰亡に歸して仕舞ふ。古今東西の歴史は之を證明して餘りある。余は此意味に於て一の平和論者である。チエンバレンの所謂『人道の迷想』の爲でなく、祖國百年の長計の爲の故に一の平和論者である。

十三　日清日露兩戰役の影響

六月十六日の東京朝日新聞を見ると『壯丁減少と體格衰退』と題する雜報がある。其に依つて見ると、東京市に本籍を有し若くは寄留して居るもので本年徴兵適齡に達したものは、一月一日現在の調べに依ると九千二百三十五人であつて、前年度に比べて七百四十六人の減少である。壯丁の數は明治四十年以降毎年八百人内外の增加を示して居るのに、本年度は却て七百餘人の減少を來して居るのは注意すべき現象である。更に神田區の中既に檢査を了へたる者のみに就て姑く其成績を見るに、甲

種合格は檢査總員の僅に一割三分餘にしか達しない。若し全體が此割合だとすると、所要の人員を補充するには第一第二の乙種を以てするの必要があるが、昨年度の如きは之と全く趣を異にし、甲種合格は檢査總人員の四割二分を占め、入營者は悉く甲種合格者から採用することが出來たと云ふ。之は僅に一部の現象であるから之を以て猝に全國を推す譯には行かぬが、要するに此の如きは二十年前に於ける日清戰役の影響たるは言ふを待たぬ。

蓋し體格の强壯な若者は當時多くは兵役に從事して居たゝめに、同年度中の出產は殆ど兵役に從事し得ざる者又は從事するの必要なき者のみの子供であるから、本年度の徴兵檢査の成績が面白くないのは當然の成行である。若し當時兵役に從事した軍人が盡く死んだとするならば、此の如きは啻に本年度に於ける一時的の變態たるに止まらずして、永久の常態と爲るべきであらう。實に恐るべき事である。

十四　歐洲大戰の血液的損害

飜つて之を歐洲現時の大戰に就て考ふるに私は其結果の更に恐るべきものたるを思はずには居られない。思ふにかの佛蘭西人の如きは奈翁時代此方、幾度か大戰を企て、或はモスカウに、或はオータールーに、或はセダンに、到る所其若者の血を棄てゝ、盛んに愛國者の種を絶やしたものである。一朝事ある時進んで國難に赴くと云ふ勇者の血は次第に絶えて、安きを貪る意氣地なしか病弱者のみが徒に後に殘つた。近時其國勢の昂らざる、風紀の次第に廢頽せんとする、出産率の年を追うて減少せんとする、皆自ら由來する所がある。然るに又此度の大戰で夥しき血を獨軍の砲彈に委ねつゝある。されば縱令學問文藝の方面に於ては多少の天才能才が其血を殘すとしても、武人軍人たるべき人の血は愈之で大半は絶滅して仕舞ふことで有らう。さうして復び舊のやうな强い國家を形造ると云ふ事は、或は永遠

に出來ぬ事になるかも知れぬと思へば、誠に悲愴の感なきを得ざる次第である。——

余は此文を讀む佛蘭西人が、余の學問的豫言の爲に怒を發せざらん事を望む。——否啻に佛蘭西のみならず、英國でも白耳義でも獨逸でも、老人は皆な後廻しにして、壯丁の方は二十歳以下の若者まで盡く之を戰場に驅り出して砲火の的に委ねつゝある。

大亂以來今日までの獨墺軍側の死傷者は約三百萬と見積る人もあるが、此中其十分の一を死者とすれば、其數約三十萬に達する。若し同盟軍側の死者も之と同數とすれば、敵味方を合せて既に六十萬の兵を失つて居る筈になるが、戰爭は猶容易に片付きさうにも無いから、遂には死者總數百萬に達することゝもならう。何れにしても子を遺さずして死に絶ゆる人の數は極めて夥しいに相違ない。かくて戰爭が續けば續くほど、歐羅巴人の種は頗る惡くなる筈である。

從來戰爭は人種改良の爲に必要だと云ふ說が行はれて居た。其說に依ると、生存

競爭は生物進化の要件である、而して戰爭は卽ち生存競爭の最も極端なる一形式なれば、其結果弱者の淘汰、强者の殘存が實現せられ、之に依つて人種の改良が行はれて行くと云ふのである。乍併此說は古を見て今を見ざるの說である。現代の戰爭殊に此度の大戰は、一騎打を主としたる弓矢の戰爭とは全く其性質を異にして居て、各個人の强弱には何等の關係なく、多數の者が一團となつて大仕掛に殺されつつある。其趣は最新の科學的智識を應用して工場組織の下に機械の力に依つて多數の貨物が一時に生產されつゝあると同じである。今日は工業が大量生產を爲しつつあると同じやうに、戰爭は大量殺人を爲しつゝある。戰爭に弱蟲を間引く效果のあつたのは、ずつと昔のことで、今日の戰爭では弱い人のみ殺されて强い者が殘ると云ふ譯で無い。弱者が淘汰されるのでは無くて、却て强者が淘汰されるのである。

近頃クレイトンと云ふ婦人の著した『世界を覆ふ黑影』を見ると、著者は深く今回の大戰の人種上に及ぼす惡影響を憂ひ、體格優良なる人々の何割かは決して戰線に

立たしめず、專ら之を文官的事務の方面に使ひ、以て血液上の損害を輕減するの策を立てざるべからずと論じて居るが、私は誠に同感である。只此の如き若干人爲の方策が果して能く大勢を挽回し得べきや否やに至つては、私の竊に疑問とする所である。

十五　歐洲大戰の物質的損害

猶以上述べたる血の損害に比ぶれば比較的輕微なる問題なれども、而も相應に重視すべき事は、今回の大戰の物質上經濟上に及ぼす損害である。之は如何程の額に達するか正確な事は勿論分る譯もないが、近頃クラモンドと云ふ人が英國の王立統計協會で發表した計算が一番精しいものかと思ふ。まだ其の委細は分らぬが『エコノミスト』(三月二十日)の報道する所に依ると、其大體は次の如くである。卽ち今年七月三十一日まで戰爭が續くものとして、つまり開戰以來一箇年間の各方面の經

濟的損害を金額に見積ると、英國に在つては

政府支出の直接戰費	九十億八千萬圓
人命損失の評價額	三十億圓
生產上の損害評價額	五億圓
計	百二十五億八千萬圓
獨逸に在つては	
政府支出の直接戰費	九十三億八千萬圓
人命損失の評價額	七億九千萬圓
生產上の損害評價額	九十五億八千萬圓
計	二百七十七億五千萬圓
白耳義に在つては	
政府支出の直接戰費	三億六千五百萬圓

人命損失の評價額	四億圓
財產破壞の評價額	二十五億圓
生產上其他の損害	二十億圓
計	五十二億六千五百萬圓
佛蘭西に在つては	
政府支出の直接戰費	五十五億三千四百萬圓
人命損失の評價額	三十四億八千萬圓
生產上の損害評價額	六十二億五千萬圓
財產破壞の評價額	十六億圓
計	百六十八億六千四百萬圓
墺太利に在つては	
政府支出の直接戰費	五十六億二千萬圓

人命損失の評價額　二十四億圓
生產上の損害評價額　六十億圓
財產破壞の評價額　十億圓
計　百五十億二千萬圓

等であつて、之に露國の損害見積額合計百四十億圓を加へると、總體で九百十五億圓になる計算である。さうして此クラモンドの意見に依れば、各國とも到底これ以上の損害には耐え得られざる筈であるから、戰爭は到底一箇年以上は續き得ないと云ふ說であるが、之に依つても——事實今度の戰爭が八月以前に終るや否やは別問題として——兎も角其損害の如何に大なるやは之を想見するに足ると思ふ。

試みに佛國ギユヨーの計算に依ると、獨、墺、露、佛、英五箇國の國民の所得は一箇年概算八百億圓で、其の富は之を金額に見積ると總額六千五百億圓であると云ふ。然らば先きに述べたる損害見積額九百十五億圓なるものは、一箇年間に於ける

交戰諸國の國民總所得以上に上り、國民總財產の約一割四分に達することに爲る。猶高橋秀臣氏の計算に依れば、日本現時の富は之を金額に見積りて總計三百七十五億圓になると云ふ事であるが、さうすると先きに述べた交戰諸國の一箇年間の損害は、日本總財產の約二倍半に達することに爲る。之は既に非常な損害であるが、況や若し戰爭が一箇年以上も續くことに爲れば、其損害は殆ど想像も出來ぬほどの事である。

以上述ぶる所に依つて見れば、這般の大戰に依つて如何に世界の文明に對する日本の責任が加はつたかゝ分る。此大亂の爲に今日世界文明の中心と爲りつゝある歐羅巴人の血の上には大損害が起り、又其最大の誇りとせる物質上の富の上に大破壞が行はれつゝあるのである。吾々は切に此の世界文明の大打擊を悲しむと同時に、深く世界萬國に對する自己の責任を自覺し、大に奮起する所なくてはならぬ。此際日本が起らなければ起る時期は無い。實に今日は日本國にとりて千載一遇の大時節

である。

十六　野蠻人の物質的生活

以上私は回を重ねて此度の大戰の歐洲諸文明國に及ぼす慘害に就て述べたが、以下私は更に讀者を誘うて遠く阿弗利加、濠洲其他の未開地に入り、暫らく是等の地方に住める野蠻人の生活狀態に向つて一瞥を與へて見たいと思ふ。狹いやうでも廣い此地球の表面には、歐羅巴式の生活以外に又別種の天地がある。

試みに阿弗利加の南部に住めるブシユマン人に關する記事を見るに、曰く

『彼等は羊も牛も飼つて居ない。さうして食物を探しながら、或場所から他の場所へと絶えず彷徨して居る。彼等の第一の好物は恐らく蟻の卵であらう。彼等は蟻の巢より其卵を掘出して、之を其の儘貪り食ふ。其外嫌な感じを與へる有毒性のものを除かば、彼等は凡ての昆蟲類を其食料として居る。彼等は其地方に居る所

の蜥蜴、蛇、爬蟲、蝗蟲、其外飲込んで消化し得る限りのものは、凡ての生物を追掛けて取つて居る。』（ソトパス「世界人類大觀」第八卷六七五頁以下）

又曰く

『彼等は數日間食物なくして過ぐることがある。若し斯かる場合に何等かの食物を發見するならば、彼等は直に之を貪り食ふ。例へば斑驢の如きは五人のものが二時間の中に其全部を食ひ盡す。彼等の武器は弓と毒矢で、其衣服は野獸の皮そのまゝのものである。又彼等の住居は洞穴か巖窟か又はポスゼの葉を圓く曲げて作つた一種の巢である。』（ケーン「世界の人類」一四〇頁。同人「過去及現在の人類」一二四頁以下。同人「人種學」二四九頁。）

之に劣らぬ野蠻人は濠洲の內地にも居る。例へばそれに關して次のやうな記事がある。

『其野蠻の狀態たる、若し文化なる語にして假に用ひ得べきものとせば、彼等は人

類文化の最下等の程度に在るものと謂ふべく、卽ち彼等は、家屋は勿論泥小屋さへも建てず、風の吹くにつれて動くところの木の葉を以て纔に覆ひ物として居るだけである。更に土地の耕作、穀物の栽培を爲すことなく、食物は食ひ得べきものならば殆ど何物をも選ぶことなく、卽ち草木の根及び果實を始めとし、蟲ならば甲蟲、蟋蟀、白蟻の類をも食ひ、猶其外大小の鳥獸及人を食ふ。ボートも造らず、刳舟も造らず、纔に有加利樹の樹皮を組んで之が代用として居る。彼等は毫も衣服を用ひず又裝飾物も殆ど用ふることなく、只鼻梁に骨を通し、又は粗末なる貝殼の首飾を掛け、且皮膚に彩色を施すだけのことである。二又は三以上の數の言葉を有たない。』(ケーン「世界の人類」四五頁)

同じく濠洲の中部に住める土人に關する記事に曰く

『是等種族の何れに就て見るも、衣服と謂ふべきもの卽ち身體の何れかの部分を覆ひ又は寒暑を避くる爲の物は、嚴格に云はゞ殆ど無いと云つて差支ない。……多

くの地方にはカンガルー及びウオラビーが澤山に居るけれども、衣服の目的に是等動物の皮を利用することは、彼等の全く理解せざる所である。……土人は寒氣を感ずることが甚だ鋭い、殊にマクドンネル山脈地方では氣溫は氷點以下に降ることが屢〻であるが、此の如き冬の夜には彼等は小屋の火の周圍で身體を震はして居る。唯一の覆ひは、婦人の着用せる小さな前掛やうのものと、男子が儀式の際に用うる總である。後者の大さは種族によつて非常に差異があるが、南方の種族に在つては、一般に小さくて覆ひとしては全く用をなさぬものである。……之と等しく婦人用の前掛も其大さは種族によつて非常に差異があるが、南方のものよりも北方の種族の用ひて居るものゝ方が大きくて且つ常用とせらるゝ傾きがある。少女は一定の年齡に達しアトナ・アリルタ・タマと云ふ儀式を經た後でなければ之を用ふることを許されない。』(スペンサー及ジルレン共著「中央濠洲の北方種族」六八三頁)。

吾々が印度洋を經由して歐洲に航行する時は、途中錫蘭島のコロンボに泊る。其

時若し船に來た賣子の繪葉書を見るならば、吾々は獰猛なる土人の寫眞を發見するであらう。此土人はヴエダー人と云つて此島の山奥に住み、其生活は次の如きものである。

『ヴエダー人は全く建築をしない。……彼等は洞穴か木の穴に住んで居る。彼等は色々な蟲や物の根其外彼等の智惠で捕へ得らるゝ物又は土地を掘つて得らるゝ物をば、其食料として居る。彼等は二又は多くとも五以上の數を算へ得ぬ。物を記憶することも殆ど出來ぬ。……音や色も十分には識別することが出來ぬ。即ち彼等は高い音と低い音とを區別し、又は赤と綠とを區別し得ぬやうに考へられて居る。』（リドバス前掲書第八卷六九五、六九七頁）。

吾々は自ら稱して萬物の靈長などゝ云つて居るけれども、以上の例で見ると、吾々の仲間には隨分幼稚な人間も居るのである。

十七　野蠻人の精神的生活

私は前回に於て野蠻人の物質的生活の一斑を述べたが、今回は更に進んで彼等の精神的生活の大體を述べて見たいと思ふ。私は私の後の議論を活かす爲に、讀者が此問題のため今一回の紙面を割くことを快諾されん事を希望する。

野蠻人の物質的生活も憐れであるが、其精神的生活も隨分憐れである。例へば前回に述べた阿弗利加のブシユマン人に關する記事を見ると（リドバス前掲書第八卷六七六頁）。

『彼等はどの人種も到底及ばぬと思はるゝ程度に怠惰である。彼等が働く唯一の動機は只飢である。彼等は二以上を算へることが出來ぬ。それより以上の數になると、凡て澤山と云ふだけである。彼等は今週の事を來週まで記憶することが出來ぬ。さうして只動物的の本能に依つて支配されて居るのみのやうである。』

と書いてある。黑猩々でさへ數の觀念は有つて居て、彼等に教ゆる時は能く六までの

數を算へ得ると云ふに（松下博士『動物の奇習奇觀』一二二頁）、二以上の數を算へ能はぬとは隨分幼稚なブシユマン人である。併し吾々は一概に彼等を嗤つては爲らぬ。吾々の國語に『八』と云ふ言葉を『澤山』と云ふ意味に用ふる場合の多いのは、昔吾々の祖先は七までの數詞は有つて居たけれども其以上は凡て澤山と云つて居たが爲であらう。例へば八洲と云ひ八潮路と云ひ八裂と云ひ、乃至八重雲、八重垣、八重葎と云ふ類の『八』は皆多數を意味するだけのものであらう。又八十島と云ひ八百路と云ひ八千衢と云ひ八百萬の神々と云ひ乃至八百屋と云ふ類に至るまで、其『八』は只『多數』と云ふだけの意味であらう。遠いやうで短いのは吾等の歴史である。吾等が活ける現代の野蠻人に就て遠き昔の吾等の祖先を知らんとするも之が爲である。

同じく阿弗利加中部の野蠻人に就きフオアと云ふ人の記載せる所によれば

『將來と云ふ事は彼等にとつて重きを爲さない。彼等は將來といふ事は考へ得ない。若し老年になつて働くだけの力が無くなれば、彼等は饑餓と困窮の爲めに死ぬるだけの事で、救ふ者も助ける者も無い。……彼等は只必要に迫られ其食料を得んが爲に働くのである。若し二日間の食料さへ得られたならば、彼等は直ぐに自分の小屋の内に蓆を敷いて、煙草を吹かしながら半分は眠つて時を過ぐす。』（ドード「黑色人種」第一卷三七六、三七七頁）。

同じく阿弗利加の黑人に關する記事に曰く

『彼等は極めて必要にして、而も一擧手一投足の勞に過ぎざることにても、愈々其必要に迫らるゝまでは出來得る限り之を猶豫する。例へば夜に入らば水を酌み又は薪を採るの必要あるは明白のことたるに拘らず、晝間は只徒に怠惰に耽り、日暮るゝも猶驚かず、漸く日沒後又は夜に入つて後、始めて其必要とする水を酌み又は薪を採る。』（フユーヒヤー「國民經濟の成立」第六版二〇頁。福田博士「改定經濟學研究」乾卷二二一頁以下）。

更にナマクア人に關する記事に曰く

『彼等は一舉手一投足の勞を吝まざれば、優に其生活を維持し得る土地に住みながら、終日太陽の下にて暖曝を爲しつゝ無頓着に怠惰に耽りつゝあるが爲め、往々にして饑餓に襲はれ、殆ど絶滅せんとすることがある。しかも人あり彼等に勞働を勸むれば、吾等如何でか地上の蟲の如く營々たるを得んやと答へる。』（ウエスターマーク「道德觀念の起源及發達」第二卷二七一頁）。

以上掲げし二三の例に依つて見れば、如何に今日の野蠻人の精神的狀態が幼稚であつて、殆ど將來を考ふるの能力なく、勤勉貯蓄の念慮に乏しきかゞ分る。思ふに數千年の昔に於ける吾等の祖先は皆此の如きもので有つたであらう。其が如何にして今日の如き文化を成就し得たか、既往を窮むれば以て將來の策を立つるに足るであらう。

十八　人は道具を製造する動物なり

私は餘り野蠻人の話をし過ぎたかも知れない。讀者の中には——若し續いて讀んで下さつた讀者があるならば——此忙しい文明の世の中で吾々の生活に何の緣も無い野蠻人の話など聞いて何に爲ると怒つて居らるゝ方もあらう。併し私は現代歐洲の物質的文明の根本的由來を說明せんが爲に、特に是等最低級の物質的生活に就て二三の事例を擧げたのである。

思ふに今日大厦高樓に住ひ美酒佳肴に飽き自動車飛行機を飛ばしつゝある文明人も、若し其祖先に遡るならば、何千年かの昔には是等野蠻人と何等選ぶ所なきもので有つたに相違ない。其が如何にして今日の如き物質的文明を贏ち得たか。

日本の政治家の或者は我國民に向つて嘗て頻りに勤儉貯蓄を說いた。乍併今日の歐米の富は決して勤儉貯蓄の結果では無い。あらゆる贅澤を盡して後尙自ら集積されたる富である。驚くべき今日の物質的繁榮は、消費の制限に本かずして生產の發達に基く、過度の勞働に基かずして却て勞働の節約に基く。憐れなる我細民に向

つて、猶此上にも働き猶此上にも儉約せよと云ふは殘酷である。又斯かる細民の勤儉貯蓄に依つて我國富の充實を計ると云ふのであるならば、其は甚だしき誤解である。勤儉貯蓄は斷じて富を成す所以で無い。若し疑ふ者あらば彼の蟻の生活を見よ。孜々營々彼等の如く勤儉貯蓄に努力する生物は地球上に於て甚だ稀である。私は先にナマカア人が勞働を勸めらるゝと、吾等如何でか地上の蟲の如く營々たるを得んやと答ふる由を述べた。彼等は終日太陽の下にて暖曝を爲しつゝ怠惰に日を送るが故に、天惠の甚だ豐かなる地方に住みながら、往々にして饑餓に襲はれ、全部落殆ど絶滅せんとすることさへある。しかも今日富に誇れる歐米人の祖先も、幾千年かの昔には之と全く同一であつたに相違ない。若し勤儉貯蓄が物質的進歩の原因であるならば、今日は人間よりも蟻の方が物質的進歩に於て優つて居なければならぬ筈である。

西伯利亞地方に居るアルヴィ コーラ・エコノームスと云ふ鼠は、夏より秋にかけて

盛に物の根を掘つて、約四貫目の食料を地下の倉庫に貯へる。されば冬が來て凡ての物が雪に埋まる時節になつても、彼等は安樂に其生活を送り得るが、只彼等の最も恐るゝ所は人間であつて、即ち土人等は冬になつて食物が缺乏して來ると、此鼠の巣を掘り當てゝは其貯藏して居る食物を取つて食ふと云ふ事である。勤儉貯蓄が物質的文明の原因ならば、何故鼠が人間に勝たなかつたか、何故蟻が人間に勝たなかつたか。

悲しい哉、蟻も鼠も能く勞働し能く貯蓄するけれども、彼等は不幸にして手を有たぬが故に道具を造り得ず、かくて彼等の物質的文明は永久或程度以上に發達し能はぬのである。而も他方貯蓄心なき怠け者の人間は、獨り自由の手を有し之に依つて自ら道具を製造し得るに至りたるが故に、其物質的文明は漸を追うて進歩し、遂に他の動物の經濟と到底比較すべからざる程度の今日の盛觀を呈するに至つたものである。

若し吾々が全く道具を有たなかつたら如何であらう。私は今坐布團に坐り机に倚り紙を展べて筆を執りつゝあるが、其筆も紙も机も布團も道具なくしては到底造り得ざる物のみである。纏へる衣服、住まへる家屋、其他一切萬事、苟くも人間特種の貨物と見るべきものに、道具の力を借らざるは絶えて無い。若し人間社會より凡ての道具を去り、從うて道具の力に依れる凡ての貨物を去る時は、同時に人間の物質的文明の一切の特徴は悉く無くなつて仕舞ふ。極めて簡單な事のやうであるが、道具を造ることが出來るか出來ぬかと云ふ只此一事の爲に、動物の經濟と人間の經濟とは今日の如き恐ろしき懸隔を有するに至つたものである。經濟學者が人を定義して道具を製造する動物といふも之が爲である。

（補説）動物の中には其勤儉貯蓄誠に驚くべきものがある。殊に前に述べた野蠻未開の人間に比べると、到底彼等の企て及ぶべからざるものがある。今其大體を知ることは經濟の發達の根本的原因が決して勤儉貯蓄に存せざることを悟

るに肝要である。仍つて嘗て他所にて述べたる動物の經濟の話の一節を左に轉載して置く。

抑々非文明人殊に野蠻人の經濟は吾人が想像せるよりも遙に幼稚なる狀態に在るに反し、動物の經濟は普通世人が想像せるよりも遙に著しき進歩を爲し居るものである。先づ之を技術的方面に就て觀察するに、多くの動物が人類と同じやうに狩獵及漁撈に從事して居ると云ふことは、普通に知られて居る事柄であるが、彼等の中進歩したる者に在りては、更に進んで一種の牧畜及工藝を營みつゝある者がある。

例へば蟻は其食物を得んが爲に他の昆蟲を利用して居るが、時としては彼等は是等の昆蟲を飼養し又は育成することがある。試みに石川（千代松）博士の「動物の共棲」と題する本を見ると（第四章及第五章參照）次のやうな事が述べてある。

何處の木や草でも、小さいアリマキが澤山居る處を氣を附けて見て居ると、必ず一疋や二疋のアリが其上を馳せ廻はつて居るのであるから、それを注意して見て居ると、アリは自分の頭の上にある二本の觸肢で一々アリマキに觸はつて見ますが、其の内にアリマキは肛門から白露の樣な液汁を出します。之れがアリマキの甘露で、我々が舐めて見ても甘いので、アリは大層好んで之れを口の内に入れます。……

何んにせよアリマキが出す甘露はアリが吸ふ露であつて、アリは大概皆な之を吸つて生活して居るの

であります、アリにも色々の種類があつて唯草木に止まつて居るアリマキを吸ふのもありますが、又アリマキの世話をして遣つて、雨天の日抔には自分の巣の内に引摺り込んだり、暖かな天氣の好い時には巣から出して遣つて方々を散歩させると云ふ樣なものもあつて、丸で人間が乳牛を飼つて置く樣であるが、又之れには我々と同じやうに乳牛を野飼にして置くのもあり、畜舍、運動場等を遣つて置いて大事に養つて置くのと同じ樣に、或る種類のアリは自分の巣を地下にある木や草の根の處に造つて置いて、自分の飼つて置くアリマキに之れ等の根を食はせて、其分泌する液汁を吸つて居るのであるとは、實に甘い仕方ではありませんか。唯生成したアリマキを飼つて置く計りでなく、秋の末になつてアリマキが卵子を產みますと、此の卵子にもアリが又世話をして遣るので、來春になると、之れから出て來たアリマキがまた直ぐにアリに食物を與へることが出來るのであります。

猶ほ以上の如き家畜の飼養は必ずしも同じ種類の凡ての蟻の間に行はれて居るのでは無くて、たとひ種類は同じものでも、文明の程度如何によりては、直ちに之を殺して食用に供し、全く家畜として飼養するの方法を知らぬ者があると云ふ事は、恰も人間社會に於ける現象と同じであつて、特に興味ある事である。

又蟻の中には其食物に種々の加工を爲し、謂はゞ一種の工藝を營みつゝある者がある。例へば英國の學者でモグリッヂ(Moggridge)と云ふ人の研究に依ればアッタ・バルバラ(Atta barbara)といふ一種の蟻は、秋の末に種々の穀物を拾ひ集めて來るが、其穀倉は平均個中時計位の大さのものが數百あつて、之

に貯藏し得る穀物の分量は合計五百乃至六百グラムに上ると云ふ事である。扨て是等の穀物を收納し終る時は、次には數週間其の發芽作用を妨げる爲に何等かの方法を取る。(如何なる方法を採るかは明かでないが、兎も角何等かの方法をとると云ふ事は、其の蟻を離して置くと、是等の穀物が發芽するから分ると云ふ事である。)さうして其後一定の時期が來て愈々之を消費すると云ふ時になれば、始めて是等の種子をば自然の發育に一任する。さうすると種子の表皮が破れて、莖と根とが生え、さうして種子の內部に在る澱粉は化學作用を起して、種子の養分を作る爲に一種の糖分を作る譯であるが、こゝまで進むと、蟻は其根を切り莖を剪みて種子の發達を中止せしめ、然る後晴天の日を待つて之を地上に持ち出し、乾燥して後再び之を穀倉に納め、此の如くにして冬期の食料に充てるのである。(委くは F. Houssay, Industries of Animals, pp. 98-101 を見られよ)

同じくアッタ屬に屬する蟻で葉切り蟻(Leaf-cutting Ants)と稱せらるゝものは、一種の菌を培養して之を其食料に充てゝ居る。之に就ては三宅理學博士、內田獸醫學士共譯の「昆蟲學」に次の如く述べてある。

熱帶亞米利加にて植物に對し最も恐るべき敵はアッタ屬に屬する數種の蟻なりとす。此種は非常の多數にて生活し、數時にして樹枝に一葉を止めざるに至るものにして、園藝家は此恐るべき蟻に對しては施すべきの策なし。實に此蟻の多き地方にてはオレンジ、珈琲、マンゴー、其他の植物の栽培不可能なりと云ふ。此蟻は地下極めて深く巣を穿ち、發掘せる土を以て垤を造る、時に直徑三四十尺に及ぶことあり。而して諸方面に巣より附近の植物に通ずる道路を設く。ベルト氏は屢此蟻が巣より半哩

を距てし地に於て働きつゝあるを目擊せりと云ふ。此蟻の攻擊するは主として植物の葉なれども、其他花、果實、種子等をも害す。蟻は四五分間にして葉より稍圓形をなせる小片を咬切り、之を自ら巢に運搬し、若くは之を地上に落下すれば他蟻來りて運搬し去る。……扨て此の蟻は掠取せる葉を如何なる用途に用ふるかは諸氏の應考究せし問題にして、ベルト氏は其眞の理由を發見せり。然れども全く疑の餘地なき迄仔細に其眞相を究めしはメラー氏の功績に歸す。即ち蟻は此葉上に一種の菌を培養し之を食餌となすなり。蟻が植物より咬切れる葉片を捏れて一種柔軟なる海綿樣の塊とせば、菌は漸々之に發生す。蟻が斯く複雜なる方法を盡して得んとするものは、此菌の菌絲先端の膨大なる部分にして、此部は液汁に富み葉切り蟻の唯一の食物ならずと雖も、然も極めて重要なる食物となる。蟻は此菌を純粹に培養せんが爲め力めて之に混ずる他の生物を除去し、又此菌の分枝を摘みて其結實を妨げ常に生育狀態に止らしむ。此菌は蟻巢以外の地に發見されし事なし云々。(三宅内田兩氏譯、フォルソム氏原著「昆蟲學」五三九—五四一頁。猶ほ原本の書名は Folsom, Entomology, with reference to its Biological and Economic Aspects と云ふ。)

以上述べたる所は何れも食物に關する例であるが、更に之を住居に就て見るに、矢張り進歩せる技術を具へ居る例が少くない。

思ふに多くの動物が巢を作る能力を具へ居ることは言を俟たぬ所であるが、今其中最も進歩せりと思はるものに就て二三の實例を茲に述べて置かうと思ふ。

例へばオートトムス・ロンギカウダ(Orthotomus longicauda)と稱せらるゝ鳥は、巢を造るに當つて先づ大きな樹の葉を選び、嘴にて葉の兩側の緣に穴を順々に明けて行き、然る後絲をば其穴に交替に通して之を袋の形に縫ひ、其中へ毛とか綿とか云ふ材料を入れて之を巢に造る。さうして其絲は如何して造るかと云へば、其主なる材料は蜘蛛の網とか綿とか云ふ類のもので、其を嘴で以て絲に紡ぐ事も縫ふ事も出來ると云ふ譯なのであるが、野蠻人の中には今日現存せるものにても、全く此の如き技術を知らぬ者が少くないのである。

又或種類の鳥には、氣候の變化に應じて其巢を造る方法を異にするものがある。これは彼等の巢を造ると云ふ技術が其固有せる本能にのみ基かざる證據と爲るものであつて、注意すべき現象である。例へばロキシア・タエニオプトレラ(Loxia taenioptrera)と稱せらるゝ鳥は、佛蘭西では夏冬共に同じやうな巢を造るが、瑞典の如き寒國では夏と冬とによつて其構造を異にし、即ち冬期には其巢の壁を非常に厚くし且つ其入口を極めて小さく造るけれども、夏期には正に之と反對である。又バルチモーレ・オリオレ(Baltimore oriole)と稱せらるゝ鳥は、北亞米利加の北方にも南方にも住んで居るが、南方の暖かい場所では、其巢たる極めて粗く造つて空氣の流通を自由にし、且其材料としては少しも暖かさうな物を用ゐぬ上に、其入口は之を西に向け成るべく強い光線を避けるやうに拵へてあるけれども、北方の寒い地方に住む者は全く之と反對で、入口は之を南方に向けて成るべく光線の射込む時間を多くしてある上に、壁は極めて之を厚くし、且其内部には種々の暖かさうな材料ばかりを用ゐてゐると云ふ事である。(Houssay,

Ibid, pp. 196, 197)

更に進んで蟻及之に類似せる昆蟲に就て觀察する時は、其工藝上の進歩は實に驚くべきものがある。例へば Termite と云ふ昆蟲は通常白蟻(White Ant)と稱せらるゝも、眞の蟻とは全く異れる別種の昆蟲であるが、此種の昆蟲には極めて精巧且巨大なる住家を築造するものがある。卽ち亞弗利加及濠洲の諸地方では、其巢は六尺乃至一丈、稀には一丈八尺乃至二丈の高さに達するものがあつて、彼等の身長の約千倍に上るものがある。此巨大なる營造物は、土壤に排泄物を混じ且分泌液の作用にて堅き粘土質と爲せるものから成り立ち、其形は金子塔狀、圓柱狀、塔狀等の種類がある。さうして其內部には多數の房室及通路があり、猶ほ地下にも隧道を設け、時としては巢より數十間の距離に延長せることがある。(前揭「昆蟲學」中、白蟻の建築と題する一節(五〇八頁以下)參照)

此の白蟻の中で最も發達して居るのはテルメス・ベリコスス(Termes bellicosus)と云ふ種類のものであるが、今ウーセイ氏の著書に依つて其建築の一斑を述ぶれば次の如くである。

此白蟻の建築の外部は、粘土の壁で圍まれて居る。其壁の厚さは、土地に接する部分は二尺から二尺五六寸に達する。壁は非常に固くて恰も煉瓦石のやうであるから、他の獸類が其上に登つても、決して破壞する虞は無い。壁を通じて二種の通路がある。一は橫に貫いて居て、之は外部との交通をする爲めの道路である。今一は壁の中を底の方から頂上に向つて縱に貫いて居るもので、之は其壁を造る時に通行の爲に設けたもので、壁を造つた後は、壁が破損して之を修復するの必要のある場合の外は、平生

は全く使用せぬものである。さうして其縱の通路は、壁の下の方になると非常に廣くなつて、更に地下三尺乃至一丈五六尺の深さに達して居る。これは元と壁土を取る爲に造つた穴であるけれども、壁の出來た後は、降雨の際に排水の用を爲さしむる爲め其のまゝにしてあるのである。次に建築の內部はどうなつて居るかと云ふに、全體が四階建になつて居る。さうして其第一階には、中央に女王及王の部屋がある。女王及び王は其部屋の中央に位し、之を圍繞して約二千許りの兵蟻及職蟻が居る。此室の壁は特に堅固であつて、且其周圍は空氣の流通の爲め窓を設け、猶ほ出入口が設けてある。是等の出入口は普通の蟻には通行自在であるが、女王は妊娠した後は、卵の成熟するに從つて其腹部が非常に膨脹して來るが爲に、最早一生を通じて外部に出づることは叶はぬのである。——フォルソムの「昆蟲學」に依れば、女王の產卵數は驚くべきもので、時としては一分間に六十個の割合に達すると云ふ。——此の如くにして女王は專ら卵を產むことばかりして居るので、文字通りに國母である。さうして王は其傍に居て看護に從事して居る。女王及び王の體を掃除したり之に食物を供給したりするのは凡て他の職蟻の任務であつて、是等のものは何れも生殖能力を有せざる者である。而して此女王及び王の部屋を中心として其周圍には又多數の部屋があつて、是等のものは凡て職蟻等の住室になつて居る。猶ほ其外側に當つて多數の部屋があるが、之は凡て食物貯藏室として用ゐられて居る。次に二階は謂はゞ空氣の貯藏庫とも云ふべきもので、之に依つて空氣の流通を計るのみならず、併せて氣溫の激變を防ぐ譯である。次に三階に上つて見ると、此處は育兒室とも云ふべき場所で、女王が卵を產む每に職蟻は其を大切に抱へて此三階

に持つて來るのである。此三階は粘土の壁で縦横に若干の小房に分ち、此處に卵が安置されてある。さうして此室に限り木片又はゴムが用ゐてあるのは、成るべく熱を傳道させぬ爲であつて、卽ち室内の溫度を成るべく平均に保ち、之に依りて卵の發育を害せぬやうにと云ふ趣旨なのである。最後に四階は全く空虛であるが、之は矢張り三階の溫度を平均に保つが爲めに屋根を高くして空氣を入れ、之に依つて太陽の熱が直に傳はるのを防ぐと云ふ趣旨なのである。(Houssay, Ibid, pp. 208-216)

扨て以上述べたる所は主として動物社會に於ける經濟上の技術のことであるが、更に其精神的方面に就て見るに、矢張り相應に著るしき進歩を爲し居る者が少くない。殊に能く將來を慮るの能力を有せる者あるは、特に注意すべきことである。——野蠻人の中には殆ど斯かる能力を有せざる者が珍しく無い、其事は既に之を前節に述べた。——今試みに其の二三の例を擧ぐるならば、例へばシベリア地方に居る鼠の一種でアルギコーラ・エコノームス Arvicola economus と稱せらるゝ者は、其名の示すが如く頗る經濟的の動物である。彼等は四寸足らずの小動物であるが、夏季より秋季にかけて、物の根を掘つて約十五キログラム(一キログラムは二百六十六匁餘)の食料を貯藏する。今彼等は如何にして其食料を貯藏するかと云ふに、先づ土を掘つて物の根を切り取り、次で無用の土を取り去り、更に運搬に都合好きやう之を短く切り、然る後之を一片宛口に啣へて後ずさりして自分の住家に持ち還るのである。其住家といふのは土地の下に拵へてあつて、中には枯草が敷いてある。さうして其住居からは、込み入つた通

路が四方に拔けて居る。若し其通路を辿つて行くならば、とう〳〵は倉に行けるのであるが、其倉の數は三ッ又は四ッあつて、各四乃至五キログラムの食料を貯ふるに足るのである。されば冬が來て凡ての物が雪に埋まる時節になつても、彼等は安樂に生活することが出來るのであるが、唯彼等の最も恐るゝ所は人間であつて、卽ち土人等は冬になつて食物が缺乏して來ると、此鼠の巢を掘つて其の貯藏して居る食物を取つて食ふと云ふ事である。(以上 Houssay, Ibid, pp. 84—88. に據る)

更に鳥類に就て同じやうなる例を擧ぐるならば、木啄の一種に屬する Colaptes mexicanus なるものはメキシコに產する鳥で、平生は昆蟲類及果實を以て其常食として居るのであるが、メキシコでは夏期になると是等の食物は全く無くなるものだから、豫め之に向つて準備して置く必要があるので、彼等は其の爲め特に腐敗の虞なき橡の實を選んで之に充てゝ居る。彼等が其貯藏庫として用ゆるものは龍舌蘭の花を持つた幹である。其幹は此地方では長さ六七尺より一丈に達するのであるが、花の凋んだ後は其幹の皮は太陽の熱に照され乾燥して固くなると同時に、內部にある液は全く無くなるので、立派な管が出來る譯であるが、彼等は之をば食料貯藏の爲めに利用するのである。彼等は先づ其幹の下部に穴を穿け、其穴よりして橡の實をば一ッ宛入れ、底の方が一杯になると、今度は又其上の方に穴を明けて之を一杯にし、此の如くにして管の全部に橡の實を詰めて仕舞ふのである。然らば何故此の如く多くの穴を明けるかと云ふに、それは管のところ〴〵に狹くなつて居る場所があつて、最初より頂上から入れたのでは途中で塞がる虞があるからである。此の如くにして彼等は夏季の食料に差支を見ざる譯であるが、

彼が他の時期に食用に供するものと、貯藏の爲めに用ゆるものと其選を異にして居るなどは、最も興味ある現象と謂はなければならぬ。(以上、前掲書、八九頁以下參照)

猶ほ動物の中には其子に向つて遺産を遺すものがある。例へばネクロフォールス(Necrophorus)と稱せらるゝ甲蟲は、屍肉を食料として居る昆蟲で、小獸、鳥、蛙等の死骸は皆彼等の好物とする所であるが、彼等は之を發見するも、己自身の爲めに用ゆる場合は、之に向つて何等の工夫を爲すことなく、直に其場所で食つて仕舞ふのである。從つて他の昆蟲も多勢集つて來て一緒に其を食ふことに爲るが、彼等は別に之を意に介しない。乍併此の如き多勢の競爭者あることは其仔蟲の爲には頗る困難の事情であるからして、彼等は其點を慮つて其仔蟲の爲めには特に之を地の中に埋めて置くのである。卽ち彼等にして鼠なり小鳥なりの屍體を發見した時には、三匹乃至四匹のものが共同して其屍體の下に辷り込み、非常なる活動を以て盛に土地を掘る。さうして約二時間もすると、屍體は段々に土地の中に埋つて行つて、とう〳〵約一尺ばかりの深さに埋つて仕舞ふ。そこで彼等は其の掘返した土を其上に掛けて、表面を平かにして誰にも分らぬやうにして置く。此の如くにして屍肉を土地の中に埋めて仕舞つた後で、雌は再び土地の中に這入り、屍肉の上に卵を產み付けて置くのである。されば仔蟲は、產れ出づるや否や直ちに豐富なる食料を眼前に發見するばかりで無く、其食料は腐敗の爲めに最も消化し易くなつて居る譯なのである。(以上、前掲書、一二二頁、一二三頁に據る)

又或昆蟲の如きは、以上述べたるよりも更に一歩を進めて、他の昆蟲を捕獲し生きたるまゝ之を其仔

蟲の爲めに貯藏して置くものがある。例へば胡蜂の一種で Sphex flavipennis と名けらるゝ蜂は、九月に其卵を產むのであるが、彼等は之が爲めに十二の穴を土地の中に掘る。さうして其一箇宛に向つて約三日の勞働を費す。今其工作の模樣を悉く語るならば、先づ横に二吋乃至三吋の長さを有する隧道を造り、然る後之を斜に曲げて更に地下三吋位の所まで同樣の隧道を造り、其末端に三箇又は四箇の房室を設ける。さうして其の各の房室に一箇宛の卵を產み付くる譯であるが、是等の房室は同時に造るのでは無くて、先づ其一つが出來上つたならば、之に一定の食料を貯へて卵を產み付けて置いて、然る後其室と隧道との間を能く塞いで置き、此の如くにして第二、第三又は第四の部屋の仕事を順々に終つて一々之を塞ぎ置き、然る後地上に出でゝ更に其處の入口を塞ぎ、何者にも氣付かれぬやうに其場所を平坦にして置くのである。次に彼等が其卵の傍らに貯藏して置く食料に就いて述べんに、其食料に充つる所のものは蟋蟀であつて、其數は卵一箇に付て蟋蟀四匹宛の割合である。卵を產む爲めの房室を造りたる後は、彼等は他の場所に飛んで行つて何處かで此蟋蟀を捕へ、非常なる困難を經て之を持ち還るのである。さうして其の持ち還つた蟋蟀は、一見すると最早死に絕えて居るやうに見えるのであるが、實は蜂の爲めに毒を注射されて一種の麻痺狀態に置かれたので、恰も植物の種子の如く、全く何等の活動もせぬけれども併し死んで居るのでは無い。かう云ふ工合にして彼等は其蟋蟀をば地下の穴に持ち込み、其胸の處へ卵を產み付け、猶ほ針を以て蟋蟀の肉に穴を穿つて置くのである。それ故仔蟲は產れ落ちたる時より生きた蟋蟀の肉を食料とすることが出來るのであつて、親の穿つて置いて與れた穴から段々に蟋蟀の

肉に喰ひ込み、かくて前後四匹の蟋蟀を喰ひ終つた後、始めて地上に出て獨立の生活を營むに至る次第である。（同上、一二四頁―一三一頁。）

十九　機械と近世の文明

吾々は往々畜類を輕蔑して四つ足と云ふが、げに吾々が二本の脚で直立が出來、是が爲自由の手を有するに至つた事は、吾々人類の大なる誇りである。吾々は此自由なる手を有するに至りたればこそ、始めて經濟的發達の根本動力たる彼の道具を造り得るに至つたのである。手あればこそ始めて今日の人間になつたとも云へる。吾々が能く手を以て人を代表さすのは、或は是が爲でも有らうか。

例へば人と人と相對するを『相手』と云ひ、馬に乘る人を『騎手』と云ひ、藝術の名人を『名手』と云ひ、運動の名人殊に徒步競爭の名人さへ之を『選手』と云ふの類は卽ち其である。奥田東京市長は市長就職前、自分如き細腕ではとても其任に耐へぬと

云つて暫く辭退されたと云ふが、腕が太いばかりで市長が勤まるならば、梅ケ谷も近頃廢業したと云ふから、寧ろ彼を推薦すべきであつたかも知れぬ。併し世に謂ふ所の『遣手』『手腕家』『敏腕家』『辣腕家』などは、必ずしも手の太い腕の强い人と云ふ意味でもあるまい。又吾々は眼に見、耳に聽き、口にて話せども、猶『見手』『聞手』『話手』などゝ云ふ。其外人間の代理を『手代』と云ひ、他人の配下に在る者を『手下』と云ひ、用事なき人を『遊手』と云ひ、働く人を『人手』と云ふの類、列擧すれば限りなきことである。

此の如く手は人間にとつて極めて大切なものであるが、其手の延長されたものが畢竟道具であつて、其道具の更に延長されたものが今日の機械である。

私は今茲に道具と機械との差異を詳說する暇を有たぬが、要するに機械なる者は普通は發動機と傳動機と道具との三の部分より成る者で、卽ち道具に加ふるに更に其道具を動かす爲の仕組を以てした者である。されば道具は單に人力の補助を爲す

に過ぎぬが、機械は之と異り謂はゞ自動的の道具である。晝夜を捨てず獨りカチ〳〵と動く時計の如きは最も小規模なる機械の一例である。既に機械は自動的である。さればこそ一たび之を貨物の生産に應用せんか、吾等は別に勞苦に服すること無くして容易に物資の豐富を致すを得る。而して今日西洋諸國の經濟が實に驚くべき發達を爲せる其根本原因は、全く此機械の應用が各方面に普及せるが爲である。私は先に彼等の富は斷じて勤儉貯蓄の結果に非ざることを述べた。然り刻苦精勵せしは人に非ずして機械である。

試みに之を新聞紙の印刷に就て考へ見るに、若し之を木版に彫て手刷にせんか、勞力を要すること非常にして費用も亦夥しきものならん。只機械の力に依らばこそ、此朝日新聞も日に何十萬部を瞬く暇に刷上げ、一日十頁、一ヶ月三百頁てふ大部のものを僅五十錢位の代價にて販賣され得るのである。今より二十年前米國にて調査せし所に依れば、三萬六千頁の新聞紙の印刷及折込に要する勞働時間は、全く

機械を使用せざれば二百十六時間を要するに反し、若し機械を使用せば僅に一時間と八分を要するに過ぎずと云ふが、之は二十年前の事、種々の改良相次いで行はれたる今日に於ては、其差は猶著しきものが有るであらう。

又米國の農業者が若し機械を用ひず五十年前の古き方法に依つて現在の收穫を得んとするならば、之が爲に生ずる增加生産費は玉蜀黍に在つては十億四千六百萬圓、小麥に在つては一億四千八百萬圓、燕麥に在つては一億六百萬圓の巨額に達すると云ふ。之も亦十年前の著書(コチレーン『近世産業の進歩』二〇八頁)に記載する所なれば、今日は猶甚だしきものあらん。

何人も巴里に遊べるものは多くは一たびエッフエル塔上の人と爲つたで有らう。聞く所に依れば塔の高さは無慮九百八十呎(約二町四十餘間)塔上には料理店酒場珈琲店等を始め無線電信の設備もありて遠く加奈陀に打電すべしと云ふが、考へやうに依つては其事自身は別に驚くほどの事は無い。現に紀元を距る遠き昔の埃及人

も高さ四百八十呎に達する金字塔を造つて居るでは無いか。否啻に埃及人のみならず、かの白蟻でさへ阿弗利加乃至濠洲地方に居る者は約二丈の高さに達する塔を造る、人間から見ての二丈は驚くに足らぬが、白蟻自身から云へば彼等の身長の約千倍に達する高さである。縱ひ簡單な道具だけでも否道具は全く無くとも、必ずしも高い塔が造られぬ譯ではない。只問題は時間と勞力の多少に夥しき差異がある と云ふ事である。現に埃及最大の金字塔を造る爲には約十萬人の人間が殆ど三十年に亙つて使役されて居るが、其の二倍以上の高さを有する巴里のエッフエル塔は博覽會の餘興として僅か三年間に落成されたものである。昔は馬上の急使を以てするも津輕より薩摩に至るに二十二三日乃至三十日を要したが、今は坐ながらにしてエッフエル塔上より遙に海上何千哩を距つる遠き加奈陀に通信するを得る。畢竟機械の特徴は勞せずして功を收むる點に在る。

二十　富國の根本義

思ふに機械の發明は人類の經濟史に於ける最大最要の事件である。恰も道具製造能力の有無に依り、始めて一般動物の經濟と人間の經濟とが根本的に其性質を異にし、二者の間に恐るべき懸隔を生じ來りしと同じ理由に依つて、機械の發明の爲に、之を利用し得ざる國民と之を利用しつゝある國民との間には、經濟上の進歩に驚くべき差異を生じ、其懸隔は恰も一般動物の經濟と人間の經濟との間に於ける其と殆ど同じ程度に達しつゝある。されば若し人間を以て道具を製造する動物と定義し得べくんば、かの所謂文明人は之を定義して機械を使用する人間と謂ひ得らるゝで有らう。而して蟻や蜂が如何に勤儉貯蓄するも到底道具を有する人間に及ばぬ如く、所謂未開人も亦如何に勤儉貯蓄するも到底機械を利用しつゝある文明人に及び能はぬのである。

考へて見ると、維新の前後に吾々が始めて西洋を見て大に驚き且つ大に恐れたのは、恰も蟻が始めて人間社會の文明を見て驚き且つ恐れたと云ふと同じである。とても叶はぬと云ふ感じを起したのも無理はない。乍併吾々は決して失望する必要は無い。到底西洋人に及ばぬなど云ふ卑怯な考へは斷じて起してはならぬ。吾々が物質的文明の上に於て西洋人に後れたのは、決して血が惡かつた爲では無い、只手が短かつた爲である。若し不幸にして吾々が蟻か蜂か乃至犬か猫であつたならば、如何に文明人の經濟を研究し、其發達の根本原因が機械の利用に在ることを理解するも、元來手を有たぬものたる以上、之に習はんと欲するも習ひ得ぬ先天的の生理的缺點がある譯であつて、只孜々營々刻苦精勵し勤儉貯蓄するの外には、吾等の物資を豐富にするの途を有し能はざる筈であるが、併し吾々は蟻では無い、又犬でも無い。吾々は人間である、手を有つ人間である。問題は只其手を延すに在る。然るを若し吾等同胞の大多數が是等蟲類畜類の分に安んじ、只勤儉貯蓄を以て其經濟を維

持するの金科玉條とするが如くんば、余は我國民經濟の前途の爲め實に浩歎を禁じ能はざる者である。如何に刻苦し如何に勉勵し如何に儉約し如何に貯蓄するも、人力車を以て汽車と競爭せんとするは絶對に不可能のことである。如何に勤勉したればとて憐れなる道具を使用して居たのでは駄目である。如何に儉約したればとて憐れなる所得を割くのでは駄目である。惰けても差支ない、贅澤しても差支ない、富國の根本義は只大に勞力を節約し大に生産を增加する所の彼の機械の利用を盛んにするに在る。私が、此千載一遇の大時節に際し吾々日本民族は大に其手を延ばさなければ爲らぬと主張するは、全く此意味である。

尤も此點は今日まで吾々の全く氣着かざりし所では決して無い。現に吾々は維新以來、紡績機械、織物機械、汽車、汽船等種々有力なる機械を極めて敏速に且急激に之が輸入及普及に努力した者である。而して我日本の物質的文明が僅々數十年の間に驚くべき速度を以て進歩したのは全く是が爲である。乍併驚くべきは只其速度

の早かりしのみで其程度は猶大に後れて居る。而して其大に後れ居る所以は全く機械の利用の未だ普及され居らざるが爲であつて、且つ其然る所以は吾々が吾々自身の爲め是迄一度も機械の發明を爲さゞりし爲である。吾々日本民族の衣食住其他一般の風俗習慣が著しく西洋人のそれと違ふ所あるは、前既に述べた。されば西洋人が彼等自身の爲に發明した機械の大部分が其まゝ我國に應用の出來ぬのは無論のことである。維新以來少からざる機械が輸入されたけれども、そは盡く吾等の生活の根本に觸れざるものゝみである。電車が出來て便利になつた、電話が出來て便利になつた、電燈が出來て便利になつたと云ふやうな方面の事が主であつて、米も酒も家も疊も傘も下駄も依然として皆昔ながらの幼稚な道具で造られて居て、吾々の生活費は只高くなるばかり、吾々の經濟は只苦くなるばかりである。吾々は手を延ばさなければ爲らぬ、併し手を延ばすのだから西洋人の手を借りて來る譯には行かぬ。

吾々は政治上軍事上の獨立を欲すると同時に、學問上の獨立を欲する、又經濟上の獨立を欲する。茲に獨立とは固より孤立の謂では無い、吾々自身の生活の根本的要求を充す爲の自家の工夫を創造することである。私共學問に從事する者も此際大に奮發して、今後は徒に歐米の學說を輸入するをのみ能事とするの陋を根本的に打破する積りである。冀くは世の實際に從事するの諸君、徒に手を拱いて此千載の一遇を空しくすること勿れ。拱ける其手を延ばして、二千五百年來養ひ來れる吾等の血をして其全力を發揮する所あらしめよ。(大正四年七月稿)

戰塵餘錄

ゆめなればさめてはかなき語草
忘れぬ中にしるしてぞ置く

伯林脱走記

一　日本人の大持て

七月が末に近くに從うて、新聞紙には、歐洲の平和が次第に危機に迫ると云ふ報道が出る。どうかものになれば好いが、歐羅巴の事だから、例に依つてお流れだらうと思つて居ると、案外にも七月三十一日には獨逸全國を戰時狀態の下に置くと云ふ布令が出る。越えて八月二日午後五時十五分には、全國の陸海軍に向つて動員令が公表せられる。露國に向つての宣戰布告が出る。愈々戰爭が眞事に爲つた。之は面白いと悅んで居ると、何處から出たか、日本が獨逸と一緒になつて露國に宣戰したと云ふ噂が起る。忽ち其が全市に傳はり、到る所で日本人は大持てゞある。市中を散歩して居た者は、大概は胴上げをされて居る。日本人の能く出入するカフエ

ー・ルイトボルドでは音樂が君が代を奏する。地方新聞は號外を出す。田舍に居る日

本の留學生は伯林以上の大歡迎を受けると云ふ有樣。流石は執着力の强い西洋人だけあつて、一たび爭つた者は終生解け得ぬものと信じて居る。十年前の日露戰爭がまだ記憶に新たなるものから、誰も彼も日本は露國を不倶戴天の敵にして居ると思つて居るのである。そこで斯樣の虛報も自ら出て來たのであらうが、兎も角吾々にとつては都合の好い虛報である。後から新聞で見ると、此日伯林の日本大使館及び漢堡の日本領事館の前には、何百といふ群集がやつて來てホツホ・ホツホ(萬歲)を唱へたと云ふ。

二　通信の杜絶

愈々戰爭が始まつた上に、日本人大持てと來て居るから、之は面白い時に留學したものだと、私は密に悅んで居たが、只氣に懸るのは通信の杜絶である。文部省の留學費は既に九月分まで受取つては居るのだが、規則書を見ると十月以後の三箇月

分が此七月中に來る事に爲つて居るので、私は其を見越して既に大分使ひ込んで居る。旅の空では生命よりも金が大切だから、當にして居た金が今來なくては誠に困る。念の爲に大使館を訪問して見ると、安心しろ何時でも引き受けてやると云ふ程の調子でもなかつたので、聊か悲觀して仕舞つた。其が丁度八月の三日であつたと記憶するが、大使代理の顏面筋は此時既に頗る緊張して居て、出來る事なら歸朝したら好からうと忠告されて居た。此際日本人は頗る愼重の態度を採らなければならぬ、餘り歡迎されて居るから反動が怖いなぞとも言はれて居た。何の事だか私には薩張り分らなかつたが、只形勢を揣摩すると、今度の戰爭には英國が加はりさうにも見える、すると日英同盟の關係から事によつたら日本も仲間に加はる積りでは無いか知らんと云ふ位の想像をして見た。さう思ふより外仕方がなかつた。

何は扨措き金がなくては困ると云ふので、翌日は倫敦の正金銀行に宛てゝ、若し文部省の金が來て居るなら直ぐに送つて呉れと打電する。然るに其と行違ひに倫敦政

府からは伯林政府に宛て、最後の通牒を寄越す。續いて翌朝の新聞には英獨開戰の記事が出ると云ふ調子に、事件は急轉直下に片付いたので、正金からの返事も來ぬ中に、英獨間の通信は郵便も電報も一切嚴禁されて仕舞ふ。斯うなつては愈々國許へ打電するの外は無いと思つたが、念のため今一應大使館へ行つて見る。すると大使館では既に委しい電報を本國に送つて、我々のためにも出來得る限りの手段を講ぜられた後であつた。其に係らず、本國からまだ何の返事も來ないと云ふ以上、此上個人が騒いだとて到底無益だと思つて、打電も見合はして居る中に、日本への電報は事實上の故障の爲に一切通じないと云ふ事に爲つて仕舞ふ。電報も通じぬと爲ると、俄に故郷を隔て、萬里の壁が出來たやう、名狀し難き一種の旅愁に襲はれる。

三　伯林居殘りの決心

日露戰爭は皆知つて居るが、日英同盟を知つて居る者は極めて少い。英国が宣戰

を布告した今日でも、日本は獨逸の味方になつて露國を攻めると思つて居る連中が、散歩の道に邀へては色色な事を話し掛ける。併し形勢は次第に逼迫したと見えて、大使館からは身許證明書を送つて來る。成るべく歸朝したら宜からうと云ふ注意書も來る。日本倶樂部に行つて見ると、既に少からざる人々が倫敦に引上げ、殘つて居る人々も大概は皆逃げ出すと云ふ意見である。大使館は金を貸し出す。

此物情騒然たる中に獨りで殘るのは聊か心細いが、併し私に云はせると、今は戰時經濟の大實驗が行はれつゝある最中である。醫科や理工科の人々は、大學の實驗室が凡て閉鎖された以上、茲に居るのは全く駄目だと云つて居たが、吾々經濟學の書生に云はせると、恰も其と反對で、今は獨逸全國が非常經濟の大實驗室に充てられて居るのである。それで私は戰時を通じて斷然伯林に殘る決心を立てた。試に大使館に行つて、私は茲に居殘る積りですが引續き學資の支給が願はれますかと尋ねると、宜しいとの事。金さへあれば大丈夫。たとひ日獨開戰と爲つて大使館の人々は

引上げても、一箇年分位の學資を殘して置いてさへ呉れらるれば、いくら獨逸人だつて吾輩を殺しもすまいから、食へてさへ行けば生命も續かうと度胸を決めて仕舞ふ。

私は凡て未定の狀態に心身を置き得ぬ質で、兎も角右か左かに物を決めて置かなければ安住が出來ない。居殘つて居る人々でも、まさかの場合には直ぐに逃げ出されるやう、大概の荷物は片付けて居る樣子であるが、私は一旦決心した以上萬事平生のまゝにして、やりかけた三浦梅園「價原」の獨譯を續けて居る。殘ると決心したからには樣子を聞く要も無いと思つたので、最早大使館へも行かず、日本倶樂部へも行かず、泰然として落付いて居る。

四　萬里故郷を隔つ

落付いて見ると淋しくもある。故郷からは當分手紙の來る望みは無い。日本の新聞紙とても見られぬのであらう。父母や妻子に宛てゝ手紙を出さうと思へば、六十

日目位でなければ日本へは着くまいと云ふ話。それに一切獨逸語で書かなければならぬので、手紙を書いても書いた氣持はせぬ。獨逸文で書く以上獨逸式に書くより外致方がないから『拜啓』の代りに『吾が愛する父よ』と書き出しはしたものゝ、田舍に居る父が人に譯して貰つて聞く時は、馬鹿な文句を書いたものだと思ふであらう。妻に宛てた葉書にも、矢張り獨逸流に『吾が愛する妻よ』と書き出したが、友人に讀んで貰つたならば、さぞ變妙な事であらうなぞと思つて來ると、聊かをかしくもある。をかしくても一向面白くはない。をかしさが却つて旅愁を增す。

さうして居る所へ、地方に居た知人は段々伯林へ集まつて來る。大使館で證明書を貰つて國外に逃げ出す積りである。元から伯林に居た友人や知人も次第に倫敦へと志す。落付いて居れば日一日とものの寂しく成る。

五　一時の緩和

日本の事情は薩張り分らぬ。英國が獨逸に宣戰してから既に十日近くにもなるが、日本の態度はまだ何とも決定せぬらしい。私は最初から、今度日本は戰爭の仲間に加はるであらうと考へて居たが、そんな馬鹿な事があるものかと云ふ説が大分有力の樣である。大使館で頻りに歸れ〳〵と云ふのは、何時までも金の無心に應ずるのが嫌だからであらう、政府から派遣された者は居ても差支ないのだ、と云ふ説も傳はる。其中に新聞紙には日英同盟の解釋などが出て、日本は英國の味方をする義務は無いのだと云ふ學者の説も表はれる。維納では日本の大使が墺太利の外務大臣と長時間の會見をして、相互の間に或理解が成り立つた、其結果日本の發展政策の範圍も地理的に約束された、と云ふ電報も載つて來る。伯林に滯在して居る日本人は金を出し合つて赤十字に寄附すると、日本人の同情と題する雜報が出て來る。大使代理も日本倶樂部に來て、さう慌てゝ退去する必要はない、勉强の出來ない人は歸朝するに越した事はないが、まあ成るべく機會を見てゆる〳〵引上げるさ、と云ふ

やうな話をされて居る。總體の空氣が次第に落ち付いて來て、私共も聊か安心して仕舞ふ。大使館では丸で電報が來て居ないと云うて居るが、實は危機既に去ると云ふやうな通知が來たのに違ひないといふ想像説も出る。

六　十四日午後の急變

それで豫定の如く依然として落付いて居ると、十四日の午後に知人が飛んで來て、大使館の形勢が只今一變して仕舞つた、大使館では皆に一刻も早く立退けと云つて居ると通知して呉れられた。一刻も早くとは何事であらうと、兎も角大使館へ行つて見る。

大使館の門前では幸にしてカイゼルを見るの榮を得た。こちらには私と友人のT君と只二人立つて居ただけであるが、私等が脱帽して敬意を表すると、カイゼルは擧手の答禮をして暫く私共の方に笑顔を向けられて居た。戰時だと云ふに自働車

に乗つて飛び歩いて居らるゝ所も案外だが、カイゼルの顔も寫眞で見て居るのよりは案外に愛嬌があつて、今正に乾坤一擲の大戰を企てつゝある獨逸皇帝その人とは思はれぬ程であつた。

此樣子では、縱ひ日獨開戰となつても、仁慈の陛下まさかに吾等平和の書生を殺し給ふ事もあるまい、と云ふやうな氣がしたが、何は兎もあれ急いで大使館の應接間に入つて見ると、そこには警告として一枚の張紙がある。今後送金の見込斷然無之に付き此際一刻も早く歸朝致され度云々と書いて、一刻も早くには圈點まで打つてある。話を聞くと日獨開戰の危機が既に迫つて居て、愚圖々々して居ると生命の危險もあり兼ねまじき樣子。何れにしても金がなくては致方がないから、私も卽時に退去の決心をして、重ねて旅費を貸して貰ふ。

今朝までは居殘ると云つて居た者が急に立つと云ひ出したので、宿の人々も大に驚き、頻に理由を尋ねるけれども、何故一刻も早く立ち退かなければ爲らぬか、只

日獨開戰の危機が迫つて居るのだらうと思ふだけで、實は當人にも一向事情は分らぬのである。豫てよりまさかの場合は一切の荷物は打ち棄てゝ只身を以て免れる覺悟では居たものゝ、明日立つことにすればまだ餘裕もあるので、夜に入つてから荷物の整理を始める。洗濯物も何も皆無茶苦茶に詰め込んだのだが、其れでも夜明けの三時半まで掛つた。大使館で荷物を預かると云ふ事だつたが、何れにしても戰爭の續く限り再び手に入る見込は無いのだから、私は其まゝ宿へ預けて置く。

七　伯林の夜逃げ

やつと一睡した後、匆々に朝の珈琲を濟まして、先づ近所の銀行に僅かばかりの端下金を引出しに行く。それから汽車の切符を買ひに行く。更にドレスデン銀行に行つて獨逸の札を和蘭の札に換へる。停車場でも銀行でも、吾々の行く所には必ず十名近くの日本人が居る。皆慌てゝ逃げ出す連中なのである。

匆々の中に日は暮れて、軈て發車の時刻と爲る。途中の停車場には赤帽が居らぬから成るべく荷物を輕くしてとの注意があつたので、殊に弱蟲の私の事だから、寢衣と着換のシャツを入れた小さなスーツケースを持つたきりで宿を出る。まだ暑いので夏服は着たものの、倫敦に逃げてから來るべき冬に重ねて新調の見込もないので、極寒用の外套を其上に纏ふ。外套の右のポケットには辨當用のサンドウイッチがはみ出してゐる。左のポケットには宿の人が氣をきかして呉れた葡萄酒の瓶が潜んで居る。時正に夜の十時半、自動車に乘つて、二月あまり住み慣れた家を見棄てる。再會期し難けれども、アウフ・ヴイデルゼーエン（また御目に懸る）と挨拶しながら帽子を振りつゝ出立すれば、家の人々露臺に出でゝ、ハンケチを振りつゝ日本語で左樣ならと云ふ。

八　西に西にと走る

停車場に着いて見ると、乘客の大半は日本人である、見知らぬ獨逸人は吾等を捉へて、何故歸るのか、歸朝の命令を受けたのか、なぞと頻りに質問を發する。一昨十三日の夜は僅かに二人の日本人しか立たなかつたのに、昨十四日は百餘人立ち、今日も亦百人近く立つのだから、不思議に思ふも無理はない。汽車は二等の切符を買つたが、態と二等に乘り込む。昨日立つた日本人の一行は發車間際に軍人の爲に席を讓らさせられて、已むを得ず四等に乘つたと云ふ噂があつた爲である。

非常に疲れては居るが、神經が馬鹿に興奮して居る。纔に半時間も睡つたかと思ふと、すぐに眼が覺めて一向に眠れない。其中に夜が明けて十六日と爲る。汽車ののろいこと夥しい。老練な運轉手は兵に徵せられて素人が車を動かして居るせいか、停車及び發車の度毎に列車は驚くべき震動をする。棚に上げてある荷物が振り落されて、思ひ掛けなき怪我をした人もある。

軍隊輸送の際に使用したと思はれる假小舍と白木の卓子とが所々の停車場にある

のが眼に着くばかり、外は茫々たる平野で、眼を慰むべき山河の眺めとては絶無である。携へ來つた辨當も今朝ほど食つて仕舞ひ、持ち來つた葡萄酒も夙に傾け盡したが、飲食物の賣子は更に來ない。腹の減つたのよりも喉の乾くのが辛い。午後の四時レーネで乘換のために汽車を下りる。始めてレモネードを飲み、辨當を買ひ込む。發車は五時四十何分だと云ふ。一時間四十分ばかりは茲で待たねばならぬのである。待つて居る中に、軍人を滿載した列車が西に走る。兵卒等は家畜車の中にまで推し込められて、牛の頭の見ゆべき所に、顏を並べて外を覗いて居る。午後六時近くにレーネを出で夜の十一時にライネといふ所に着く。既に國境に近き所だといふ說である。どうせ今夜も眠られないから、いつそのこと好きな珈琲をといふので、そこの待合室へ入つて二杯を傾ける。之が恐らく獨逸から送る最後の葉書であらうと云ふやうな事を、例に依つて獨逸文に認めながら、故郷の父母妻子に送る。

九　國境の一夜

十二時十分にライネを出發すると、一時前に汽車はまたザルツプルグといふ所に停る。愈々此處で國境の檢査があるのかと思ふと、さうでは無い。國境までの汽車は夜が明けてから更に出るのだと云ふ事である。小さな驛なので十分に腰を掛くべき場所もない。幸ひに出發すべき列車は既に構内に來て居るので、私は同僚のT君と共に、四等の列車にスーツケースを持ち込んで、珍らしき此一夜を語り明かす。經費節減の爲でもあるか、構内の電燈も過半は消されて仕舞つた。列車の中は固より眞暗である。誰が云ひ出したとも無く、日本からの最後通牒は十七日に送る筈だと云ふ說が傳はる。數へて見ると今日は既に十七日である、最後通牒を送つたら最後、獨逸の事だから何をするか分らぬ。早く國境外に出して呉れゝば宜いのに、寒き夜を國境近くに止められて、影薄き月の光に吸ひ飽いた煙草を猶も吹かしつゝ夜

の明くるを待つ中に、思ひは遙に故郷に馳せて、十年前歸省後東上の際、汽車中にて見たる宮島沖の月のことなど思ひ出づ。

十　國境の檢査

五時三十三分發車、間もなくベルトハイムといふ所に停車する。時計を見れば正に六時、此處にて國境の檢査があるのだと云ふ。

國境の檢査に就いては伯林で樣々の噂があつた。英國の銀行劵を持つて居る者は、靴下の底へ敷けと云ふ說さへあつた。日本字で書いたものなぞは一切嚴禁だと云ふ說もあつた。手紙でさへ獨逸文で開封でなければ許さぬ位だから、生きた人間を出すとなれば相應に嚴重な檢査があるに違ひないと、私も最初から思ひ定めて居た。汽車中でも色々な說があつたので、折角樣々の事を書き集めて居た手帳も、文字のある所は引裂いて棄てゝ仕舞つた。それほど迄に警戒してやつて來たが、來て見れ

ば案ずるほどの事もなく、私なぞは鞄も開けぬ中に檢査濟といふ紙片を貼つて貰つた。先づ之で無事に免れ出た譯である。因つて他日の記念の爲、檢査濟の紙片の上に、大正三年七月十七日獨蘭の國境を通過すと記入する。

十一　やつと和蘭

十七日午前八時半今度は和蘭の首府海牙までの切符を買つて、始めて和蘭の汽車に乘り込む。ところが九時前にオルデンツアールと云ふ最初の停車場で汽車は停つて仕舞ふ。茲で一旦下車して稅關の檢査を受ける必要があるのだといふ。

降りて見ると、茲でも矢張り兵隊が停車場を警戒しては居るものゝ、國境一つ越えて和蘭となつたゞけで、軍人の體格も服裝も俄に見劣りのせらるゝものと爲つた。獨逸では特に體格の秀でた者が軍人になつて居る樣子に見えたが、茲では外に能のない者が軍服を着せられて居るかに見えた。

次の汽車は午後の四時過に出るのだと云ふ。オルデンツアールの待合室は殆んど日本人を以て充滿されて居る。遠慮なく日本人が凡ての椅子を占めて盛に日本語で語り合つて居る所を、椅子のない和蘭人が細君や子供の手を引いて隅の方から驚きの眼を見張つて居る樣子は、どうしても日本が和蘭以上の强國たることを證する。郵便局へ葉書を出しに行つても、局員は態々窓から顏を出して、吾々にお辭儀をして居る。獨逸に居る時も、頻りに獨逸人が日本の態度を氣にするので、日本も偉くなつたものだと思つたが、今和蘭に來て見ると、益々日本の偉くなつたのが氣に着く。昔は彼等の祖先が日本にやつて來て、吾等の祖先にお辭儀をさしたのであらうが、今は吾等が玆にやつて來て、彼等を眼下に見おろす心地で待合室を占領して居るのである。

十二　汽車中の祝盃

十七日午後四時過オルデンツアールを發車す。坦々たる平野、所々に水を湛へて、豫てより聞き及びし水國の樣が次第に展開せらるゝ。夕刻アメルスホールト驛に着し麭麭に麥酒を買ひ込む序に、和蘭の新聞紙を買つて見ると、初號活字で日本の最後通牒と題する電報が載つて居る。和蘭語は獨逸語に能く似て居るので、殆んど殘らず讀めて仕舞ふ。之ではさぞ獨逸人が怒つたであらう、早く逃げ出して宜かつた、其にしても日本は偉くなつたものだ、愉快々々、一つ祝盃を擧げようと云ふので、茶の代りに買ひ込んだ麥酒を、コップなければ皆喇叭飲みをやる。

十七日夜は海牙に一泊。翌十八日は此世界戰爭の最中に、有名なるカーネギーの平和殿を見る。夕刻海牙出發、途中幾度か乘換へて夜の十二時海岸のフラッシングといふ所に着く。玆より海を越えて倫敦に渡らんが爲である。一同直に汽船に乘り込んだが、多勢で一時に推し寄せたので、容易に寢室も取れない。私なぞは夜明け近くの三時半漸く寢臺にありつく。翌十九日午前十一時出帆、夕刻五時英國の海岸ク

イーンスボローに着し、夜九時半漸く倫敦市中の旅館に身を置く。疲れて〳〵私は綿のやうに爲つて居る。

後から聞くと、獨逸の國境は十八日までは無事に通れたが、十九日には早や二人の日本人が拘留されたと云ふ話。何も彼も置いて來たのは不便至極だが併し生命と手足だけ無事に持ち出した以上、此際祝はなければ爲らぬ譯である。

（大正三年九月二日倫敦にて執筆）

英獨の開戰

一　百餘日の前

八月二日は獨逸が露國に向つて宣戰した其日である。此時私はまだ伯林に居て、午前に宣戰の號外を見、午後は家を出て終日市中をぶらつき、翌朝の午後二時近くに始めて宿に歸つた。宿に歸つてからは、瓦斯の光の下に、夜を徹して其日の印象を認め、直に郵函に投じたが、其原稿は未だに日本に着かぬらしい。果して何處でどうなつて居るか、或は夙くに獨逸官憲の手に依つて燒かれて仕舞つたか、恐く再び手に入る見込はあるまい。

考へて見ると、獨逸が露國に宣戰した其八月二日は、實に今度の大亂の第一頁である。其當時はこれほどまでになると思はなかつたが、其後間もなく英吉利が加はり、白耳義が加はり、軈て日本も加はり、遂には土耳其まで加はつて、海陸の戰

は東西兩半球の南北に跨がり、歐洲の平野のみにても兵を動かすこと一千五百萬、交戰國の人口は合計無慮十億、世界總人口の過半に達するが如き、實に有史以來の大亂と爲つて仕舞つた。此大亂の第一日偶主戰國の首都に居るを得て當時の光景を目擊したる事は、あはれなるべき余が一生にとつて、或は記念すべき事の一であるかも知れぬ。

算へて見ると、それは既に百二十餘日前のことである。今私は英國の田舍に來て、人家凡そ三十に過ぎぬ小さな村の農作人の一間を借りて居る。見渡す限り茫々たる平野で、そこに大波をうつた畑地と牧場とが横つて居る。時正に初冬、聞ゆるものは吠ゆるに似たる風の聲と羊の群の鈴の音のみである。それでも日曜日には敎會の鐘が鳴る。其時私は村人の仲間に入つて、其小さな村の敎會に詣る。嬋て祈禱が濟み、讃美歌が終ると、敎師の說敎が始まるけれども、牧師の英語は耳に入らで、動ともすれば嘗て巴里のカーナヴアレーの博物館で見た奈翁の遺品——齒磨粉に薄

赤く染まつた楊子なぞが、あり〳〵と眼の前に見えて來る。でも此處は敎會である。眼を上ぐれば正面には十字架にかゝつた基督の彫刻があり、右手の高壇には牧師が白衣を纏うて博愛を說いて居る。或歷史家は歐洲の歷史は、奈翁主義と基督主義との爭鬪の歷史である、故にニーチエ出づればトルストイ出づと說いて居るが、今英國に來て見ると、少くとも田舍では凡ての人が日曜日には皆寺に詣る。併し英國の領土に太陽の沈む日が無くなるまでには、その太陽は戰死したる英人の屍を照すこと無くして沈んだ日は無いと稱せられて居る。

こんな事を考へながら、樫（オーク・エルム）榛の落葉飛ぶ夕、空を仰いで獨り此野中に佇ずんで居ると、只何とはなしに悲しくなる。——八月二日、其翌曉にかけて書いたやうな原稿は、とても今は書けない。

二　當夜の伯林

其を今書かうと云ふのでは無い。が未だに忘られぬのは其夜の光景である。地下鐵道に乘つてフリードリヒ街に出て見ると、左右の人道は人に埋まつて居る。其でも押しつ押されつして居る中に、やつとウンター・デン・リンデン街と交叉した四辻までは出たが、とても此のまゝ茲に立ち盡す譯にはゆかぬ。――リンデン街はブランデンブルグ凱旋門よりカイザーの宮城に通ずる伯林屈指の大道で、其フリードリヒ街と交叉して居る此四辻は今夜の見物に最上の場所である。私共は今此目抜の場所を占領して今夜の光景を目擊しようと云ふのである、どのカフェーのどの椅子も、皆既に占領されて居るらしく見えたが、それでも幸にして大道に臨んだ二階の露臺に然るべき空席を發見してそこに落付いた。フリードリヒ街を挾んで相並んで居るのはカフェー・バウエルで筋向ひがカフェー・ヴイクトリアである。其カフェー・ヴイクトリアでは、つい先達て日本から再度の洋行に出掛けて來た一學友に連れられて、遙に傾く月を眺めながら、物靜かに故郷の話など換はしたのであるが、今夜は

其處の露臺にも、溢るゝばかりの人が、下を通る行列と呼應して、ホツホ、ホツホ(萬歳)を連呼して居るのが見える。私の今居る家の前も、狂喜せる群集に殆ど立錐の地も無い。絶えず行列が通る。是等の行列は先頭に獨墺伊三國の國旗を立て、之に從ふ群集には約三分の一の婦人が見える。彼等は聲を合せてドイツチユランド、ドイツチユランド、ユーバー、アルレス(獨逸々々、萬國一の獨逸)を高唱しながら、四辻に來ると、上下呼應して、旗を振り帽を振りつゝホツホ、ホツホを連呼するのである。號外も絶えず出る。本紙大の號外を積んだ各新聞社の自動車が絶えずやつて來て、車の上から其號外を八方に向けて投げる。すると群集は、獸を爭ふ鯉の如く、之を奪ひ合ふ。乘合自動車は、來るものも〳〵盡く滿員である。其が四辻に停まると、二階に居る人々は杖を逆さに下げて、街上の群集から號外の讀み糟を貰ひ受け、萬歳々々と連呼しつゝ、嬲て搖られながら北に走り南に行く。或は四五の若い女の一組が自用の自動車に突つ立ち、愛國の歌を合唱しながら、手巾を風になびかせて、

群集をかき分けて通る者もある。路傍には次第に主を喪つた帽子の數が殖える。――凡て狂喜の樣である。私は曾て見た事も無い。

それは獨逸が露國に只宣戰しただけの夜のことである。しかも伯林市民の歡喜の樣は、恰も戰勝の祝日であるかのやう、殆ど手の舞ひ足の踏む所を知らざるかに見えた。當時デイリー・メールの伯林通信員として居たワイルが、他日倫敦に歸つてから『激動せる伯林の其夜の光景は、一生私の記憶から去らぬであらう。其夜の光景を見るに至る以前に於いて、若し人あり余に向ひて、獨逸人は果して戰ひを欲しつつありやと尋ねたならば、私は躊躇することなしに否と答へたに相違ない。私は某月某日開戰の報を得て狂喜せる伯林市民の樣を目擊して、始めて從前の考へを覆へした者である』と云つたのも無理はない。

私は必ずしも伯林市民を以て戰ひを歡迎した者とは見ない。又私は必ずしも伯林市民を以て獨逸國民を代表する者とも見ない。しかし私は八月二日、獨逸が露國に

宣戰した其當夜に於いては、六千八百萬の獨逸人中、何人と雖も近き將來に於ける戰勝の光榮を疑つた者はあるまいと信ずる。少くとも當夜リンデン街に歡呼の聲を揚げた幾萬かの群集の中には、其より數日の後更に英國といふ一大强國を敵に持たねば爲らぬと豫期して居た者は、恐らく一人も無かつた事と信ずる。

元來獨逸の軍略は、一擧にして巴里を陷れ、直に馬首を回らして露領に攻め入る筈であつた。然るに開戰後早や百二十日になるが、佛蘭西境の戰爭は未だに片付かず、カレーへと志してからも既に五十日になるが、其もなか〳〵手に入らぬ樣子である。八月二日の夜、萬國一の獨逸を歌つた連中に果して之を豫期して居た者があつた乎。

三　英獨の外交

八月二日の夜二時――正確に云へば八月三日の午前二時――私は自分の下宿に歸

つた。さうして夜を徹して其日の印象を認め、三日に其を郵函に入れたと記憶する。併し其原稿は今日來た大阪からの手紙で愈々着かぬものと諦めた。さうして私が大使館に船越大使代理をお尋ねしたのは此三日の午後だと思つて居たが、只今考へ直して見るに、當時私の用件は、一は文部省の學資金のことを尋ね、今一つは日本へ向けて何とかして日本文で通信する方法はあるまいかと云ふことを相談したのであつたから、當時私は既に日本文の通信は禁止されて居る事を知つて居た筈である。して見ると、大使代理をお尋ねしたのは、例の原稿を郵函に入れた三日の午後では無くて、或は四日の午後であつかも知れぬ。日記帳も何も伯林に置いて來たので確かには分らぬ、只其が午後の四時であつた事だけは明瞭に記憶して居る。其時大使代理は非常に忙しいので、まだ晝飯も濟まして居ないと云つて居られた。若し其れが四日であつたとすると、今日から考へれば、實に面白い時であつた。卽ち時正に伯林駐在の英國大使サー・イー・ゴッシエンが、外務大臣サー・エドワード・グレーより

の電報を受取り、一大重要問題の談判の爲、恰も獨逸の外務大臣フオン・ヤゴーに面會して居る最中なのである。

ゴッシエンの受取つた電報には、先づ白耳義國王が英國王に向つて、白耳義の利益の爲に外交的干渉を爲さんことを懇請したる全文を傳へ、次に獨逸が白耳義に向つて其領土の自由通行を要求したること。及白耳義は之を以て中立違反なりとして拒絶したることを傳へ、最後に英國政府は白耳義の中立を保護するの義務を有するが故に、獨逸に向つては宜しく其白耳義に致したる要求を撤し、且其中立を侵さゞるの保證を爲さんことを求むるの決心を有する旨を傳へ、之を結ぶに『貴下は右に對し其卽答を求めらるべし』(You should ask for an immediate reply)としてあつた。今其訓電に基き彼はフオン・ヤゴーに面會して、英國政府の要求を述べ終ると、フオン・ヤゴーは遺憾ながら私はナイン(否)と答ふるの外は無い。と云ふは、我が獨逸軍は今曉早くも白耳義の國境内に攻め入つたから、其中立は實は既に破られて仕舞つ

て居る。しかし之は獨逸の軍略の上からは到底避くべからざる事なのだから、其點は惡しからず貴政府の諒察を請ふと辨じた。そこでゴツシエンは更に其事の英獨國交の上に悲しむべき結果を齎すべきことを說き、縱ひ旣に獨逸軍が白耳義の國境を侵したとしても、更に之を呼び戻す事にしては貰へまいかと述べて見たが、フオン・ヤゴーは今回の戰は我國にとつて生か死かの戰であつて見れば、我國としては軍略上最善の方法を採るの外は無い。遺憾ながら獨逸軍を引き戻すなぞ云ふ事は只今のところ不可能であると答へた。

ゴツシエンが此會見を終つて大使館に歸ると、英國の外務大臣から、又電報が來た。披いて見ると、獨逸は白耳義の外務大臣に通牒を送つて、獨逸政府は已むを得ざるに於ては武力を以て其必要と信ずる計畫を實行するの外なき旨を告げたさうである。又獨逸軍は現に白耳義の國境に進軍したと云ふことである。此上は、我政府は白耳義の中立に關する獨逸の保證を重ねて要求し、之に對する滿足なる回答を今

夜の十二時までに受取りたい決心である。『若し其が出來ぬならば、貴下は直に旅券を受取り、且獨逸政府に告ぐるに、我政府は白義耳の中立及び獨逸も其締結者の一人たる白耳義中立條約の維持の爲めに、其權力內に在る一切の行動を敢てするの餘儀なきを感ずる旨を以てせらるべし』とあつた。そこでゴツシエンは再び車を外務省に驅り、フオン・ヤゴーに面會して右の電文を示し、兩國國交の破裂の恐るべき結果を齎すことを述べて、其再考を煩はした。それは八月四日午後七時——私共は下宿屋で冷肉の晩食を取つて居た頃のことである。するとフオン・ヤゴーは十二時は恐か、二十四時間乃至其以上の餘裕を與へられても、私の返事は數日來繰返した所と同じであると答へた。

此會見は極めて僅な時間であつた。

四　獨逸宰相の憤怒

英獨國交の斷絶を具體的に決定した此歴史的會見の後に、ゴツシエンは或は之がお目に懸かれる最後かも知れぬからと云ふので、更に獨逸の大宰相ドクトルベートマン・ホルウエツヒに面會した。

面會して見ると、大宰相は「非常に激動した」樣子で、すぐに話を始めて、約二十分間ハラング(煽動的演説といふ譯もある英語)を續けられた。――とゴツシエンは後日サーエドワード・グレーに報告して居る。――唯中立といふ一語、戰時に際しては幾度か無視された此一語の爲に貴國は開戰を敢てすると云ふの乎。中立條約といふ其一片の『紙屑』の爲に、貴國は其友邦たる以外何等の他意を有せざる我國に向つて、開戰を敢てすると云ふのか。貴國と親密なる關係を結びたいと云ふ私の多年の苦心も、之で水泡に歸して仕舞つた。貴國の遣り方は私には全く了解が出來ぬ。人が左右に敵を受けて必死に鬪つて居る最中を、後から來て打ち伏せると云つた遣り方である。其結果どんな恐ろしい事が起つても、其は皆貴國の責任である。白耳

義の中立保護も宜しいが、一體貴國は其爲にどれだけの代價を拂ふ覺悟なのか。全體貴國政府は其犧牲に就いて、一應考へて見られたか。なぞと云ふのが、其時獨逸の大宰相の口から出た言葉である。

之に對してゴツシエンは、如何に結果は恐ろしくとも其は神聖なる條約を破るの口實にはなりませんから已むを得ませんなぞと、多少の辨解は試みたが、如何せん大宰相は英國の最後通牒の爲ひどく激動されて居て、理窟を云つても到底耳に入らぬ樣子であつたから、此上燃き付けてもと思つて、好い加減にして切り上げた。――と、之も彼自身が前の報告書の中に云つて居る。――ゴツシエン辭し去らんとするに臨み、大宰相は更に言葉をかけて、英國が獨逸の敵の仲間入りをしたと云ふ事は、其國が我國と共に殆ど最後まで、墺露間の平和を維持する爲に努力した間柄であるだけ其打擊は一層酷いとこぼした。

扨てゴツシエンは此厭な會見を終ると、すぐに大使館に歸つて、時正に午後の九